

# 学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか —地域連携事業における大学生のアクティブ・ラーニングの効果の検証—

米田佐紀子・太田美帆

## 要 約

本研究は、玉川大学の地域連携事業である静岡県下田市における小学生に対する英語活動をアクティブ・ラーニングと位置づけ、その過程で学生は何を学んだのかを検証したものである。この事業の特徴として、通常授業における英語指導に校外で児童が外国人と交流する活動も含まれている点が挙げられる。分析資料として事前・事後アンケート、報告書、J-POSTLによる自己評価分析、小学校教諭からのフィードバックを活用し、英語指導および交流活動の意義、英語力や自信の向上、将来への有益性などを中心に効果を検証した。分析方法にはt検定とKH Coderによるテキストマイニング手法を採用した。

その結果、本事業に対する学生の満足度は非常に高く、児童や教諭からのポジティブなフィードバックに強いやりがいを見だし、教職志望の有無にかかわらずキャリア目標や自己成長に向けての有益性を見いだしたことが明らかになった。一方、初めての授業実践で指導力不足を痛感し、英語力や自信の顕著な向上は見られなかった。これは学生の課題が具体化され目標が明確になったと肯定的な評価となった。一連の活動を通して学生は、仲間との協力、やり遂げる力などを身につけ、児童から多くの刺激を受け、教師の苦勞と魅力を実体験から学んだことがわかった。

これらのことから、学外での実践を含む体験的学習への参加により学生は幅広くかつ深い学びを得たと結論できるが、実践までに英語力・英語指導力の向上をいかに図るかが今後の課題として残された。

キーワード：小学校英語活動、アクティブ・ラーニング、大学と地域の連携事業、下田市、KH Coder, J-POSTL

## 1. はじめに：本研究の背景とねらい

### 1.1 プロジェクトの背景と概要

玉川大学は2016年4月に静岡県下田市と「連携・協力に関する基本協定」を締結し、「下田市との連携を進め、教育、文化、観光、環境、学術等の分野において相互に協力し、地域の発

展と人材育成に向け取り組んでいく」（玉川大学、2016<sup>1)</sup>）こととなった。

開国の町下田市では黒船の来航と開国を記念し、毎年5月に市最大の祭典「黒船祭」を実施している。この黒船祭には毎年米国海軍も参加し、市民らとの親睦を深めている。その一環として市内の小学校では米国海軍「水兵さん」（以降本論では下田市での通称に即して「水兵」と記述）を招き、小学生と水兵の交流事業を実施してきた。下田市はこの交流効果を促進するため、文学部比較文化学科と英語教育学科に協力を依頼、学生が小学生の英語力およびコミュニケーション力の向上の支援をする「黒船交流プロジェクト」の開始に至った。初年度の活動が下田市教育委員会や児童、保護者らから好評だったことから、下田市側はこの活動の継続的实施のため「大学と連携した英語力向上プロジェクト推進委員会」を設置し、組織的な体制を整えた。一方本学側も、参加学生の満足度が高く、本体験学習活動から得る教育効果が高いことから、2017年度から本プロジェクトを授業化（詳細は表1-1）し2単位科目と位置づけ、継続的に実施する体制を整備した。

下田市教育委員会の説明（2017年3月時点）には新学習指導要領における高学年の教科化および中学年での「外国語活動」の導入も言及されており、単なる英語にふれることや英語学習への動機づけに留まらず、英語指導という位置づけで本プロジェクトを本学に依頼していることが分かる。実際、下田市における小学校での英語指導は黒船祭を意識し、5、6年生の4月に行う4時間分を下田市独自のレッスンと位置づけ、地域を題材にした授業内容を扱っている。ただし、英語指導に特化するのではなく、キャリア教育の効果も下田市側は確認している。高校も大学もない下田市においては小学生が大学生とふれあう機会は少ないため、例えば学生が

表1-1 「黒船交流プロジェクト」概要

目的・概要	静岡県下田市との連携のもと、小学生の英語力およびコミュニケーション力の向上を目的とし、小学生への英語学習活動や国際交流活動などを学生が主体となって企画実施する。 主な活動内容は、①小学校における英語活動（2時間）、②小学生と水兵との国際交流活動支援、③「黒船祭」における小学生と水兵との国際交流活動など3つの企画実施。事後は活動をふりかえり、成果と課題をとりまとめ、報告会での発表、報告書やHP記事などを作成し学修成果を発信する。
実施の流れと活動	2017年2月～5月17日【学内：事前活動】 ガイダンス、グループワークにて企画準備、指導案・教材作成、リハーサル等 5月18～20日（3日間）【下田市：現地実習】 5月18日 児童との交流及び英語学習活動① 5月19日 英語学習活動②および②児童と水兵との国際交流活動補助 5月20日 児童と水兵とともに下田市内のウォークラリー 5月中旬～7月【学内：事後活動】 反省会、報告会での発表、報告書やHP記事の作成
参加学生	比較文化学科4年3人、英語教育学科2年22人（計25人） 内訳：「英語教員養成コース」（中高1種免許）16人のうち、12人が小学校2種免許も取得中。「ELFコミュニケーションコース」（教員免許取得を目指さない）7人
協力校	下田市立下田小学校
担当教員	太田美帆、米田佐紀子

意欲的に授業プランの研究を進め、熱心な指導をする姿は児童にとって憧れの存在となり、大学進学を意識するような機会にもなっているようだ（下田市教育委員会，2017）。

英語学習活動（学生による英語指導）のテーマとねらいをクラス毎に表1-2にまとめた。この英語指導は翌日の水兵との交流の下準備という位置づけであること、2時間しかないことから原則同一テーマとし、1時間目に語彙・文型の導入と練習、2時間目に水兵との交流を想定した運用練習という流れになっている。なお、本研究では「英語活動」は「外国語活動」の前身である科目の名称ではなく、英語を用いた学内外での活動を指す。ここで行なわれる指導は、英語指導であるという考え方にに基づき、「英語指導」という言葉を用いる。

表1-2 各クラスの英語指導のテーマとねらい

学年・組	英語学習活動①（5/18）	英語学習活動②（5/19）
1年1組	テーマ：水平さんに自己紹介しよう ねらい：London Bridgeの歌やダンスを使ったゲーム活動を通じて、自己紹介をすることができる	テーマ：水平さんに自己紹介しよう ねらい：前回学んだフレーズを活かし、仲間集めゲームをとおして、英語を話したり聞いたりして自己紹介することができる
1年2組	テーマ：英語で水兵さんにあいさつしよう ねらい：英語でのあいさつを聞いて、何を言っているのかが分かる	テーマ：英語で水兵さんにあいさつしよう ねらい：英語でのあいさつを覚えて、使える
2年1組	テーマ：一緒に（スポーツ）しよう！ ねらい：スポーツの名前を英語で学びながら友達を誘う文が分かる	テーマ：（スポーツ）ができますか？ ねらい：スポーツの名前を英語で質問できる
2年2組	テーマ：水兵さんに“Do you like ...?”と聞いてみよう ねらい：水兵さんの好きなものを自分からたずねることができる 単語の正しい発音、英語の歌に合わせて歌うことができる	テーマ：水兵さんに“Do you like ...?”と聞いてみよう ねらい：隣の席の子が好きな具材を聞いて、お気に入りのハンバーガーを作ってあげられる 実際に会った時に、水兵さんの好きなものを自分からたずねることができる
3年1組	テーマ：水兵さんに食べ物について説明できるようにしよう ねらい：食べ物の名前を覚える	テーマ：水兵さんに食べ物の味が説明できるようにしよう ねらい：食べ物の味を聞いて、説明できる
3年2組	テーマ：水兵さんに自分のことを知ってもらおう ねらい：自分の好きな色を言える	テーマ：水兵さんに自分のことを知ってもらったり、英語で好きな色を質問したりしてみよう ねらい：疑問文を使って好きな色を相手にたずねることができる

4年1組	テーマ：水兵さんに数字を使って自己紹介ができるようになろう ねらい：水兵さんに自己紹介ができる	テーマ：水兵さんに数字を使って自己紹介ができるようになろう ねらい：水兵さんに自分の年齢を自己紹介で言える
4年2組	テーマ：馴染みのある単語を英語で何というかを知ろう ねらい：知っている動物やスポーツ、食べ物の単語を英語で言える	テーマ：クラスで一番人気のあるものを調べてみつけよう ねらい：相手に何が好きか質問でき、同様に水兵さんにも何が好きかをたずねられる
5年	テーマ：水兵さんと好きな動物について質問したり答えたりしよう ねらい：動物の単語 What animals do you like? I like .... が言える	テーマ：水兵さんと好きな動物について質問したり答えたりしよう 動物園ツアー計画を立てよう ねらい：動物やスポーツなどの単語を用いて What ... do you like? I like .... が言える
6年1組	テーマ：自己紹介で自分の一番好きな物を聞いたり答えたりできるようになろう ねらい：児童が自己紹介で自分の好きなものを言うことができる	テーマ：自己紹介で自分の一番好きな物を聞いたり答えたりできるようになろう ねらい：児童が自己紹介で自分の好きなものをいうことができる
6年2組	テーマ：水兵さんに食べ物紹介や何が欲しいか聞いたり伝えたりしよう ねらい：食べ物に関する単語が英語らしい発音で聞いて分かる・使える	テーマ：水兵さんに食べ物紹介や何が欲しいか聞いたり伝えたりしよう ねらい：店員さんとお客さんの役になり、英語のやり取りができ、バイキングゲームで自分の好きなものを手に入れることができる

## 1.2 本研究のねらい

黒船交流プロジェクトは、一連の活動を学生が主体的に行うアクティブ・ラーニングである。本論では第1に、2つの主な活動に即し、英語指導力および交流活動について、その意義、英語力や自信の向上、将来への有益性、難点・利点の点からその効果を検証し、第2に、その結果から今後のプロジェクトや指導活かすための示唆を得ることをねらいとする。

## 2. 調査の概要

### 2.1 参加者

本プロジェクトに参加した学生は玉川大学文学部比較文化学科4年生と英語教育学科の2年生、合計25名であった。そのうち本調査に参加したのは4年生1名と2年生22名の合計23名である。このうち16名は中高の一種免許が取得できる「英語教員養成コース」(以下、教員養成コース)に在籍しており、このうち小学校免許も目指しているのは12名であった。それ以外の7名

は免許取得を目指さない「ELFコミュニケーションコース」<sup>2)</sup>(以下、ELFコース)の学生であった。教員養成コースの学生は「教職概論」「教育原理」などの教職の意義や基礎理論に関する科目は履修済みであったが、英語の指導法に関する科目は未履修であった。それらの科目は2年生秋～3年生初夏にかけて行われる留学後に履修することになっている。したがって、いずれの学生も児童に英語を指導したり、水兵とコミュニケーションをとったりするという点から見た既習事項に大きな違いはなかった。強いて言えば、本プロジェクトの外国語活動の指導の点で動機づけや目の付け所が異なることが予測された。

## 2.2 分析資料および手続き

本研究に用いた分析資料は主に以下の4点である。科目担当教員が作成した質問紙、学生が作成した報告書、受け入れ校の下田小学校からの振り返り冊子(下田市立下田小学校, 2017)を用いた。

- 事前調査アンケート(2017年4月実施): ①学生自身の小学校時代の「英語活動」の有無, ②英語に触れさせるねらい, ③成功させるために何をすべきだと思うか, ④自信度を5段階で回答してもらい, その理由を尋ねた(資料1)。
  - 事後調査アンケート(同年7月実施): 英語指導, 水兵と児童とのウォークラリー, プロジェクト全体についての3点について4件法(4: とてもそう思う～1: 全くそう思わない)で回答してもらい, その理由を書くよう指示した(資料2)。
  - 「言語教師のポートフォリオ(英語教職課程編)」(以下, 「J-POSTL」<sup>3)</sup>) (同年7月実施): 53項目を用いて, J-POSTLの記入方法に従って5件法(5: できる～1: できない)で自己評価をしてもらい, なぜそう思ったのか理由を書いてもらった(資料3)。
  - 受け入れ校からのフィードバック(同年6月作成): 事後に下田小学校がまとめた冊子「平成29年度黒船交流会 玉川大学黒船交流プロジェクト」(下田市立下田小学校, 2017)を活用した。各担任からの本プロジェクトに関する全体的な振り返りが記載されている。
  - 報告書(同年6月作成): 学生が事後3週間以内に作成した「黒船交流プロジェクト 2017年度活動報告(以下, 報告書)」。
- 記述項目は①この体験から学んだこと, 得られたこと, ②今回の反省点と改善案, ③全体を通しての感想, ④先生方・子どもたちへのメッセージが, 一人1,000字から2,000字程度で記録されている。

## 2.3 分析方法

事前・事後アンケート・J-POSTLによる授業実践自己評価をそれぞれに分けて分析を行った。どの調査もまず, 学生の自己評価得点, 平均値, 最大値, 最小値, 標準偏差を算出した。教員養成コースとELFコース間の差が有意か否かを見るため $t$ 検定を用いた。



自由記述についてはKH Coder 3を用いたテキストマイニングを用いた。KH Coderとは社会調査のために用いられている計量テキスト分析ソフトの1つである。本ソフトは、データを多変量解析し、対象とする文書や回答にどんな言葉が何回出現していたのかを調べ、対応分析・クラスター分析・共起ネットワークなどの多変量解析を行う機能を備えている（樋口, 2014）。KH Coderには、①助詞・助動詞等を省く、②活用を持つ語は基本形に直して抽出する（「多くて」「多かった」→「多い」）、③平仮名だけの語は省く（「する」「なる」等は省かれる）といった特徴がある。本研究のデータでは同一の事柄について多様な表記（例えば「子」「子ども」「小学生」「児童」等）が見られ、別項目としてカウントされることが分析過程で確認された。本来、自由記述文の書き換えなど、データに手を加えることは望ましくないが、より実態に即した傾向を掴むため、同一内容のものについては表記の統一を行った。様々な手法を試した結果、統一したほうが本質的な理解につながると判断した。また抽出したい語は「強制抽出」機能を使用する必要がある。本研究の分析で重要な語句や「授業参観」などの複合語は強制抽出を行った。

共起ネットワークは、共起する語と語を線で結んでネットワークを描くことにより、解釈を容易にするものである。重要なのは、線で結ばれているかどうかであって、結ばれていない語同士には関係性がないことに注意する必要がある。「強い共起関係ほど太い線で描画」を選ぶことで、Jaccard係数で測定した共起の程度に応じて共起関係を表す線の太さが変化する。Jaccardの類似性測度は0から1までの値を取り、関連が強いほど1に近づく。あくまでも目安であるという断りがあるものの、0.1は「関連がある」、0.2は「強い関連がある」、0.3「とても強い関連がある」とされている（樋口, 2013）。本分析では0.2を採用し、出現回数が2回以上を原則とした。共起ネットワーク図では語句の頻出度が円で示されており、線で結ばれている語は関係性があること、また、太い線ほど強い共起関係があることを示している。共起関係のあるものはCommunity（以下、「コミュニティ」）に01, 02などと示され黒や濃淡のグレーを用いて色分けされている。

### 3. 結果と考察

本章では分析結果について述べ、考察を行う。まず、第1節では小学校英語指導に関する事前調査により英語指導に関する学生たちの経験や知識・考え方を探る。第2節では英語指導実施後の自己評価と受け入れ校教諭からのフィードバックにより学生たちの英語指導に関する学びを多角的に検証する。第3節では水兵・児童とのウォークラリーについて、そして第4節ではプロジェクト全体をとおして、学生たちは何を学んだと感じているのかを見ていく。各問について自己評価得点、平均値、最大値、最小値、標準偏差、自由記述結果、報告書の記述を合わせて分析し、考察を行う。

### 3.1 事前調査結果について

事前調査では23名中17名から回答があった。問1「小学校で英語の時間がありましたか。どのようなものでしたか。」に対して、16名が有ったと回答した。指導はALTが行い、内容は英語の歌、簡単な挨拶、単語や絵カード、カルタなどでの遊びだったことが示された（図1）。また「遊ぶ」という言葉に象徴されているように学生たちは小学校英語を学習というよりは遊びの時間としてとらえていることが確認できた。

筆者（米田）は約30年にわたる教員経験から、多くの学生は自分の経験に基づき自分が教わったように教えることを見てきた。ここから、本プロジェクト参加学生たちも自らの体験に基づき簡単な挨拶・ゲーム・歌を扱った同じような指導案を考えると予想された。

問2「小学校で英語に触れさせるねらいは何だと思いますか」については、図2が示すように小さいうちから言語（外国語）や文化に触れること、児童の時から国際的なものに慣れること、興味を持たせる、中学校の授業の下準備であり、英語は中学校から本格的に開始すると考えていることがねらいであると捉えていることが示された。

問3「みなさんの授業を成功させるには何が必要で、みなさんはどうすればいいと思いますか」については図3に示した結果となった。

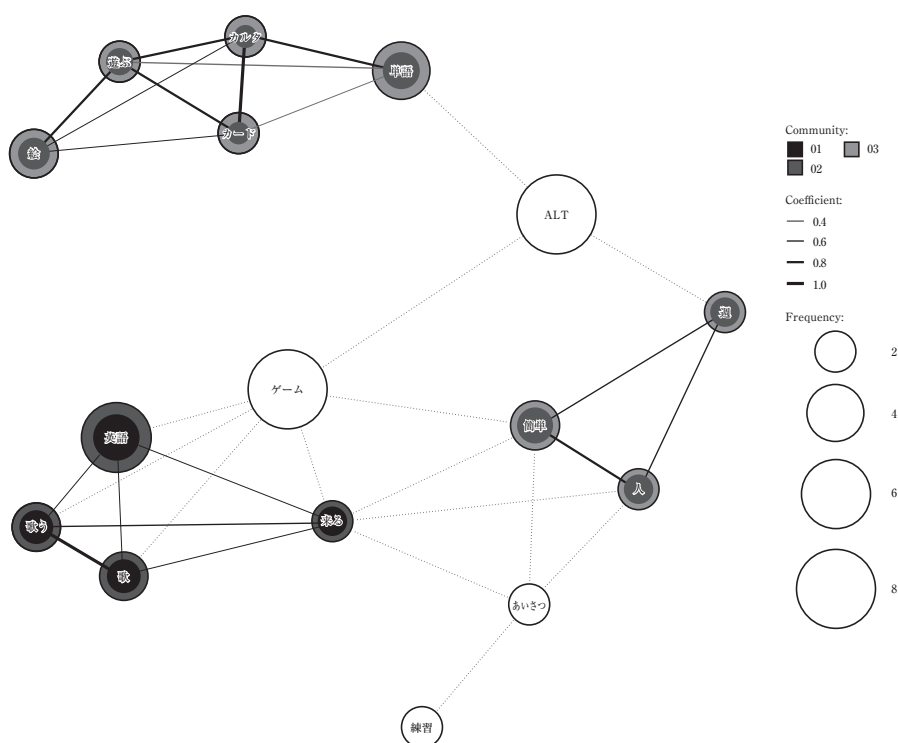


図1 問1「小学校で英語の時間がありましたか。どのようなものでしたか。」に関する共起ネットワーク

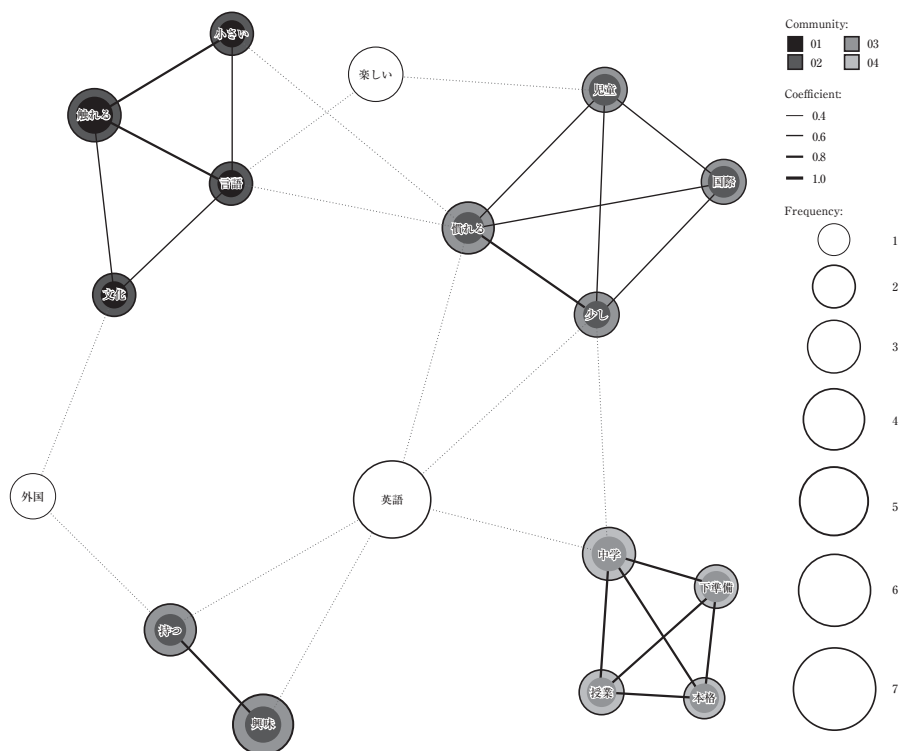


図2 問2「小学校で英語に触れさせるねらいは何だと思いますか」に関する共起ネットワーク

本結果から、(児童にとって興味が持てる) 楽しい授業、英語を楽しく学ぶこと、そのためには「事前練習」が大切であることが成功の秘訣と考えていることが示された。成功の秘訣は「楽しみ」(楽しませること)であり、前出の学生たちが受けてきた教育内容と酷似していることから、その影響を受けていると考えられる。

問4「今回の授業を成功させる自信はありますか」では、5段階評価で自信度を示してもらった。結果は最大値が5点中4点の(まあまあある)で、最小値は1(全然ない)であり、平均は2.94で「どちらともいえない」という結果になった(表3-1)。12名と5名なので参考程度として考えるほうが良いことを踏まえた上で、教員養成コースとELFコースのグループ間の相違を確認するため、自己評価を $t$ 検定(両側)で検定した。その結果、 $p < 0.05$ で両者に有意な差があることが示された。

表3-1 授業を成功させる自信度 (N = 17)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	$t$ 検定
全体 (17名)	2.94	4	1	0.94	} 0.03*
教員養成 (12名)	2.67	4	1	0.94	
ELF (5名)	3.60	4	3	0.49	

\* $p < 0.05$



# 学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか

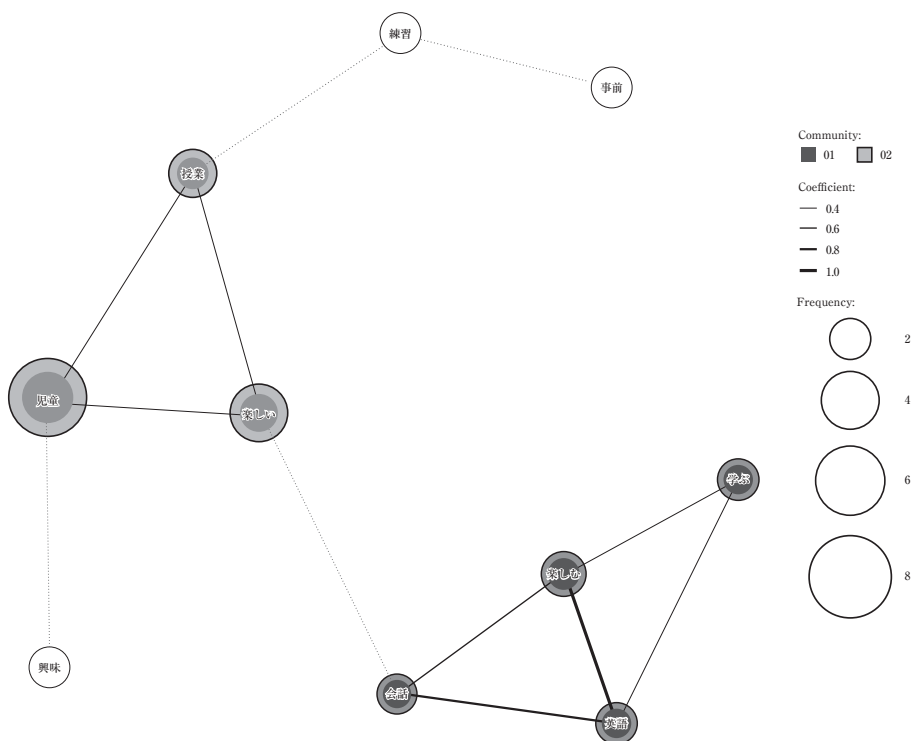


図3 問3「授業を成功させるには何が必要で、どうすればいいと思いますか」に関する共起ネットワーク

自由記述の分析結果（図4）からは、やる気があるから自信がある、教壇に立って人に教えたことがないので不安、児童を相手に授業をするのは不安ということが示された。

これをさらに見ていくと、教員養成コースの学生は1～3点を付けていた。理由として教えた経験がないので自信がない・不安・分らないと記載されていた。一方で、ELFコースの学生は経験がないと述べてつも3～4点を付け、やる気があるから大丈夫という教員養成コースとは反対の意見を述べているのが特徴的である。教員養成コースでは教えた経験がある学生もいることから、教えることが簡単ではないという実感を持っており、このような結果になったと考えられる。

以上事前調査結果から、学生はほぼ全員が小学校で英語を学んだ経験を持ち、「慣れ親しむ」「楽しい」「ゲーム」「歌」「遊び」をする時間と捉えている傾向があり、授業の成功は児童が楽しめるかに鍵があると考え、自身の経験が彼らの考え方に影響していることがつかめた。その一方で成功させる自信は若干中点を下回り、未経験なので不安・分らないという気持ちとやる気さえあれば大丈夫という楽観的な姿勢が示された。

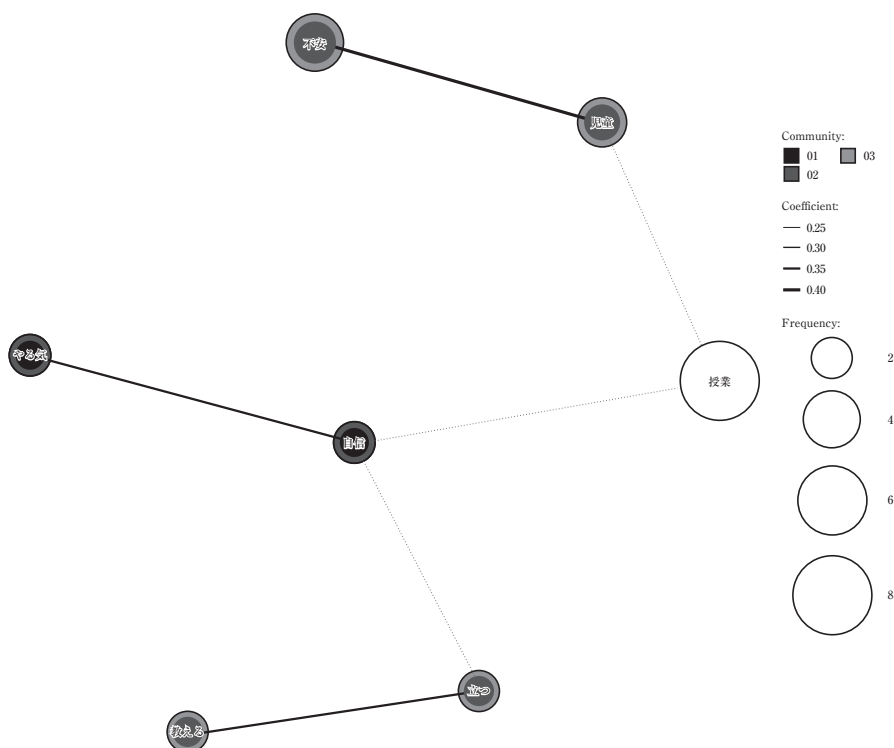


図4 問4「今回の授業を成功させる自信はありますか」に関する共起ネットワーク

### 3.2 英語指導に関する効果検証

ここでは英語指導に関して多角的に検証していく。「はじめは『上手に授業をしなくては』『価値のあるものを児童に提供しなくては』といった義務感があった。学生の身分でありながら、本物の教育現場で実際に児童を相手に授業をするというのは、非常に大きなプレッシャーであり、緊張もした（報告書の記述より）」に示されているように学生らにとっては、現場実践が多くの学びにつながった。以下これについて述べる。

#### 3.2.1 英語指導に関する事後アンケート結果について

本節では英語指導について、4月の準備開始から当日までの約1ヶ月を振り返って、指導力や英語力についてどのように感じたかを問うた事後アンケート（資料2）および報告書を分析資料として、調査結果と考察を述べる。

##### ① 英語指導の意義

問1「英語指導は自分にとって有意義でしたか」については4点中全員が3～4点と回答した（表3-2）。コース間に有意な差はなかった。教員養成コースだけでなく、将来教職以外のキャリア

を考えている ELF コース全員が有意義であったと回答したことは特筆すべきことである。

表3-2 問1「英語指導は自分にとって有意義でしたか」回答結果 (N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	3.91	4	3	0.28	} 0.16
教員養成 (17名)	3.88	4	3	0.32	
ELF (6名)	4.00	4	4	0.00	

次に、自由記述文についてみていく。図5が示すように頻出語彙は5つの関連したコミュニティに分けられた。ここから以下のように読み取れる。英語の指導を実際に行うことで多くを学んだ、初めて（小学校英語指導の）楽しさを（まじかに）見ることができた、授業を実際行ったことでその大変さを感じることができた、教員に将来なる自分にとって良い経験になったと読み取れる。

報告書には学生たちの充実感、達成感、喜びの声があふれており、いかに本活動が有意義だったかを物語っている。

第1に、児童の笑顔から得た「児童がとても可愛く、児童の笑顔を見て頑張ってきてよかつ

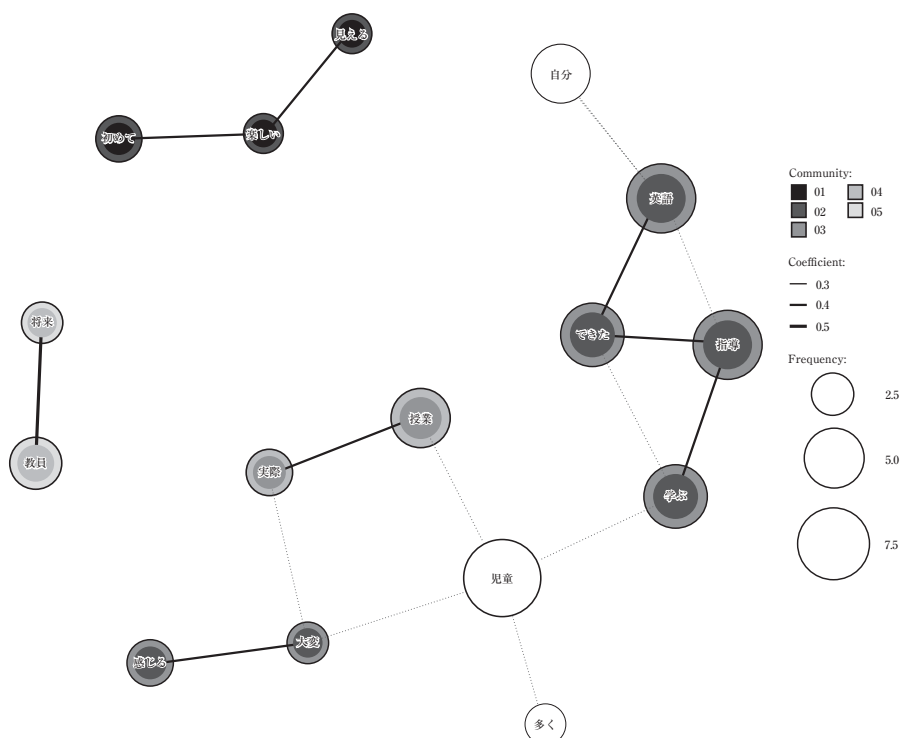


図5 問1「英語指導は自分にとって有意義でしたか」に関する共起ネットワーク

と感じた」「とにかく児童の純粋な笑顔のおかげで、とても楽しむことができた」「子供たちの元気いっぱい反応は、授業をしていてとても楽しかった」「子どもたちの英語への興味・関心は高く、英語を教えるやりがいを感じた」などの充実感について述べているものが見られた。

第2に、初めて教壇に立った学生たちが感じた、教師という仕事の大変さとやりがいが「参加して本当によかった。指導案や教材作りは大変だったが、やりがいも大きかった」という言葉に代表されている。これは教員養成コースの学生のみならず、ELFコースの学生のコメントにも「学校の先生は何気なく授業をしていると思っていたが、裏では様々な試行錯誤が繰り返されていて、ねらいや意図を持って授業が構成されていると知ると同時に、1時間の授業の重みを感じた」という経験を通して『先生』という仕事の大変さ、過酷さ、偉大さを体得したようだ。

第3に、児童からのポジティブなフィードバックが学生のやりがいの根拠となっていることがわかる。『英語楽しいって思ってくれた人!』と聞くと、たくさんの児童が手を挙げてくれて、今まで頑張って授業の準備をしたのが、報われた気がして泣きそうになった」「クラスの子どもたちが『英語の授業楽しかった!』『授業のおかげで水兵と話せた』など、温かく嬉しい言葉をかけてくれたので、今までの努力が報われたような気持ちになり、達成感や充実感で胸がいっぱいになった」といったエピソードが並んでいる。

本プロジェクトの特徴として、学生による2つの授業の目的が「児童と水兵の交流を促進させる」ためと明確であり、その到達度をその場で確認することができる点がある。そのため「児童が授業で練習したことを水兵に言えた時は、涙が出そうなくらいうれしかった」というやりがいに繋がっているのだろう。

## ② 英語指導力の向上

問2「本指導を通して自分の英語指導力が上がったと思いますか」については、全体平均は2.87でコース間の平均値にも有意な差はなかった（表3-3）。問1に比べて自己評価得点は下がったものの midpoint の2.5を超え、どちらかと言えば上がったと感じたことが示された。

表3-3 問2「本指導を通して自分の英語指導力が上がったと思いますか」回答結果（N = 23）

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体（23名）	2.87	4	2	0.61	
教員養成（17名）	2.81	4	2	0.68	} 0.93
ELF（6名）	2.83	3	2	0.37	

自由記述文による上記の理由の分析結果（図6）では、4つのコミュニティが示された。これらは太い線で結ばれているだけでなくすべてが緩やかに繋がっている。

学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか

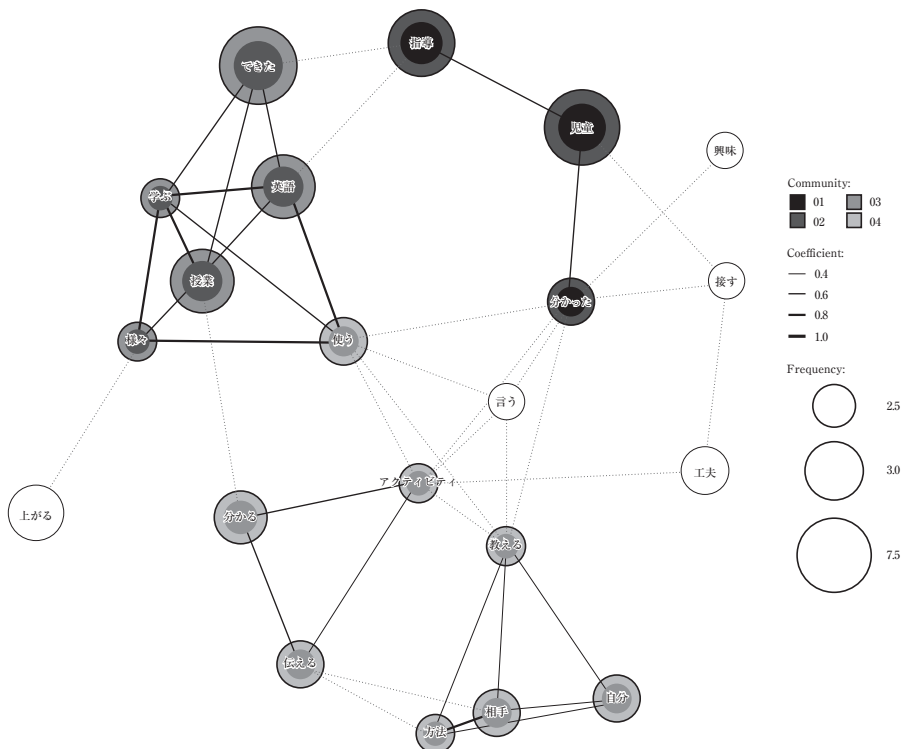


図6 問2「本指導を通して自分の英語指導力が上がったと思いますか」に関する共起ネットワーク

ここから、学生たちは児童に指導をするということがどういうことか分かった、英語を使った授業から様々なことを学ぶことができた、最後にアクティビティを伝えたり分かってもらえたりするには相手によって教え方を変える必要があることを学んだと考えられる。本来、数か月で指導力が上がるということはある得ないが、指導案の書き方すら知らずに取り組みを開始した学生たちにとっては、アクティビティ作成に工夫を重ね、何度も指導案を書き直し、未熟ながらも精いっぱい準備して英語の授業をしたこと、努力の末に自分達の指示が子どもに伝わったことや授業に興味を持ってもらえたと感じたことが、今回の指導自体が彼らの向上であったと捉えていることを示していると考えられる。中でも、相手によって伝え方を変えねばならないということを学んだことは職種を問わず必要なコミュニケーションスキルであり、大切なことを体験的に習得したと言えるだろう。

一方、報告書の学びや反省についての記述の大半は英語指導に関することであった。初めての授業実践を通して学生は自分たちの認識の甘さや力不足を痛感したことが読み取れる。

全プロジェクトを通して「最も大変だったのは授業準備」である。準備段階では「授業を作り上げるための指導案の作成、教材作りといった準備は想像以上に過酷」であり、「たった一回の授業の準備がとても大変だということが分かった」。なぜなら「対象の学級に対して適したレベルの教材や指導を実践することの難しさ」や「子供に新しい知識を教えるためには、ど

こに狙いをもって授業をするのか、児童が興味を持つためにどんな工夫をしなければならないかを学んだ」からである。初めて指導案を作成する学生にとって「指導案が完成するまでは私に授業ができるのか不安でいっぱいだった」のは当然であろう。だからこそ模擬授業を重ね「色々な人に見てもらい客観的なアドバイスをもらったほうがよかった」のに「練習不足だった」。他方、「皆で、意見交換し、協力し合うことにより高度な授業を作ることができた」「各担当のクラスごとに分れて授業を行ったが、当日までに何度も違うクラスと授業を見せ合ったり、批判しあったりしながら、一つの授業を作り上げることができた。このプロジェクトが成功したのは、彼らと共に協力し合ったからだ」と、仲間との協力により一人では為しえないことを成し遂げて自信をつけた学生もいる。

準備に相当の時間をかけ、なんとか指導案を完成さ練習も重ねて当日に臨んだわけだが、教壇の学生を当惑させたのは児童の予想外の反応や想定外の状況である。「集中できていない子供を授業に参加させることができなかった」り、「盛り上がりすぎてクラス全体がうるさくなってしまった」り、「理解するのが遅い児童もいたのでそういった児童にどうすればいいのか、どこにレベルの標準を合わせるのか」戸惑ったり、「聴覚的に情報を取り入れるのが得意な子どもと、視覚的にとらえるのが得意な子どもがいる」現実に驚いたり、当然ながらほとんどのクラスで「指導案通りに行かなかった。当日は、臨機応変な授業が求められた」「各々の反応も様々で、指導案通りにいかないことを痛感し、学んだ」。

そのため「どんなハプニングが起きてもいいようにあらゆる場面（児童の数が欠席等で合わない、反応が全くない、教材が使えない状況になった場合など）を想定して準備、練習をする」とよい」「比較的英語力の高い児童がいたため私たちが教えた自己紹介では簡単すぎたため、予備の英語も考えておくと良い」「子どもたちの集中力を維持するためにもう一つ何かゲームやアクティビティを用意できていれば充実した授業の内容になった」という具体的な改善案が提示されている。

授業内の時間配分や間の取り方も難しく、「指導案はつめつめで、捨ててもよい活動があるくらいがいい」場合もあれば、「授業時間を超過してしまい児童の集中が続かなかった」場合もある。常に「想定外のことを考えて指導案を考え、授業をしていかなければならない」ことを学生たちは痛感したようだ。

児童への指示も難しい。「難しい説明だと子どもたちは困惑してしまうため、端的かつわかりやすい説明が最適」であり、「児童の理解度に合わせて適切な言葉を選ぶ必要」がある。「ジェスチャーを大きくして注目させ、ゲームの内容をわかりやすく説明」する一方、「児童に話を聞く態度を確認させる」というメリハリも必要なことに気づくことができた。「授業を行う中で大切なことは、周りを見る力。いかにして消極的な子にも目を配り授業内容を理解してもらったり、楽しく授業を受けてもらうかの重要性を学ぶことができた」。

「机や椅子を下げてしまうと児童の集中力が続かない」ため「教室の隊形まで考えるべきだった」。また今回は学生2-3人でのチームティーチングであったため、「ペアとの連携、協力、意



思疎通」は不可欠で、「各自の役割を確認しながら進める」べきであったという反省も見られた。

なにより「授業をする者が楽しんでいないと、子どもたちにもそれが伝わってしまう」。だからこそ授業外でも「児童とコミュニケーションを積極的にとることの大切さ」をあらためて実感している。「私は楽しみながらも真剣に取り組むことができた。自分が楽しんで取り組むことで、その姿勢は児童に必ず伝わるということ」を学ぶことができた。

初日を終えて戸惑うばかりの学生にとって大変ありがたかったのは、授業を見学していた学級担任より30分～1時間にわたり授業の講評をいただいたことだ。各担任は親身になって学生に具体的なアドバイスを下さった。「先生方は、一番児童のことを理解しており、私達に足りなかった『子どもたちを見る』ということを優しく教えて下さった」「授業のやり方や英語の教え方だけではなく、生徒とのかかわり方、どのようにクラスを作っていくかなど様々なことを学んだ」。これらのアドバイスは「私たちでは気が付かない教師としての目線だったのでとても勉強になった」し、「気を配り、子ども達のそばに寄り添うのはとても難しい仕事」だとも感じた。

「印象的だったのは教員と児童・生徒の関わりだ。(先生は)自分の受け持つクラスの児童でなくとも、積極的にあいさつや声掛けをされていた。『あいさつは大切だ』とただ教えるだけではなく、自身の態度でそれを示しながら児童とコミュニケーションをとることで、児童との信頼関係を築いているのだと感じた」「授業のやりやすさは、日頃の学級経営からだと思えて感じた。英語を教えるだけでなく、生活の中での子どもの接し方を学ぶことができた」など、学生たちもプロの先生方の仕事をよく観察していた。

このように初めての授業実践によって学生たちは自身の力不足を如実に痛感しながら、非常に多くのことを具体的に学び、体得したようだ。

### ③ 英語指導力に対する自信の向上

問3「本指導を通して自分の英語指導力に自信がついたと思いますか」については、表3-4に示したように、自己評価得点は指導力に比べ若干得点が下がっており、得点のばらつきも大きくなった。両コースの得点に有意差はなかった。ここから、問2では英語指導の知識や技能が皆無に等しかった自分達が教壇に立って2時間を教え切ったという気持ちが表れていたものの、自信がついたかといえはむしろ力不足や課題を痛感した気持ちが強かったことが示されている。

表3-4 問3「本指導を通して自分の英語指導力に自信がついたと思いますか」回答結果 (N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	2.78	4	2	0.78	
教員養成 (17名)	2.81	4	2	0.83	} 0.32
ELF (6名)	2.50	3	2	0.50	

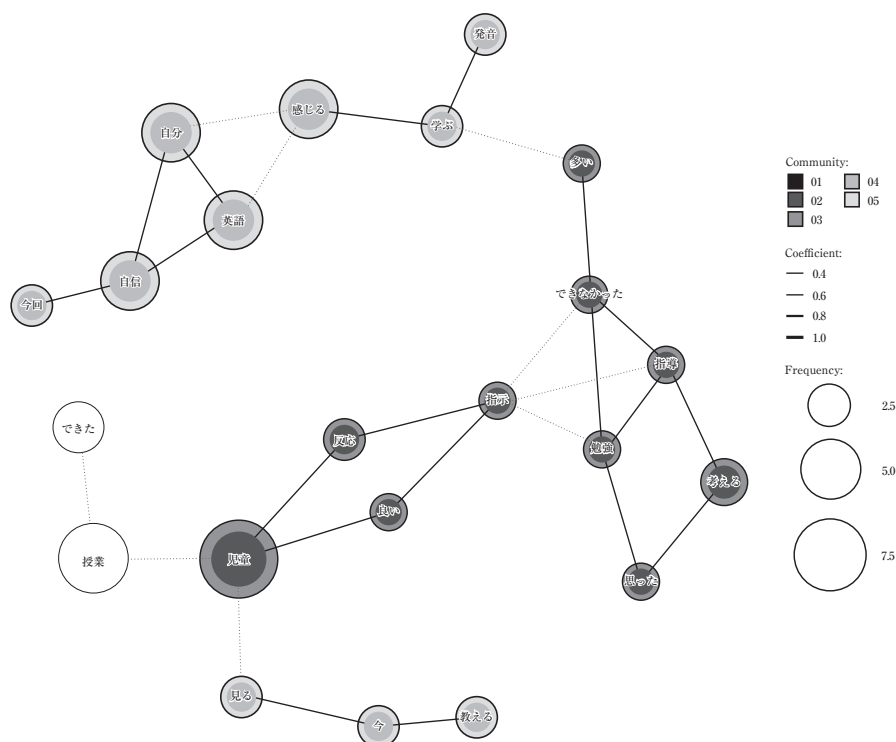


図7 問3「本指導を通して自分の英語指導力に自信がついたと思いますか」に関する共起ネットワーク

図7の自由記述から児童が良い反応してくれた、今回英語を使って授業をやり遂げたことが自信になったと感じる一方で、発音を学ぶ必要性を感じた、指導できなかったことが多かった、勉強しなくてはと思ったという思いが示されていると読み取れる。

報告書の記述から補足すると、「最後には『授業楽しかった!』と言ってくれた時には、代えがたい喜びを感じ」「英語を指導した一員として、客観的にものを考える姿勢が得られた活動」であり、「何よりも今後の自信に繋が」ったとする学生もいる。「児童が英語についての質問をしてきたり、『英語楽しい、頑張るよ』と言ってくれたり、児童自ら『水兵さんに質問したい』と頼ってくれたり、少しでも英語に対する興味を持ってくれた人が出たことが1番の成功だったと感じた」り、「学年によってどの程度の英語なら覚えることができるのか、どんな遊びを取り入れたら楽しく英語を覚えられるのかなど活動内容の作成の難しさを知ることができとてもいい経験になった」学生もいる。

他方、「私がなりたいと思っていた先生を実際に体験することができて、私の覚悟がいかに甘いものだったのかを思い知らされ」、「今後教師として授業をするにあたっての多くの課題があると感じ」、自信に繋がらなかったことで、「私がすべき課題が見えてとてもよかった。次に参加するときに課題が改善できているようにしたい」という向上心が芽生えたようだ。

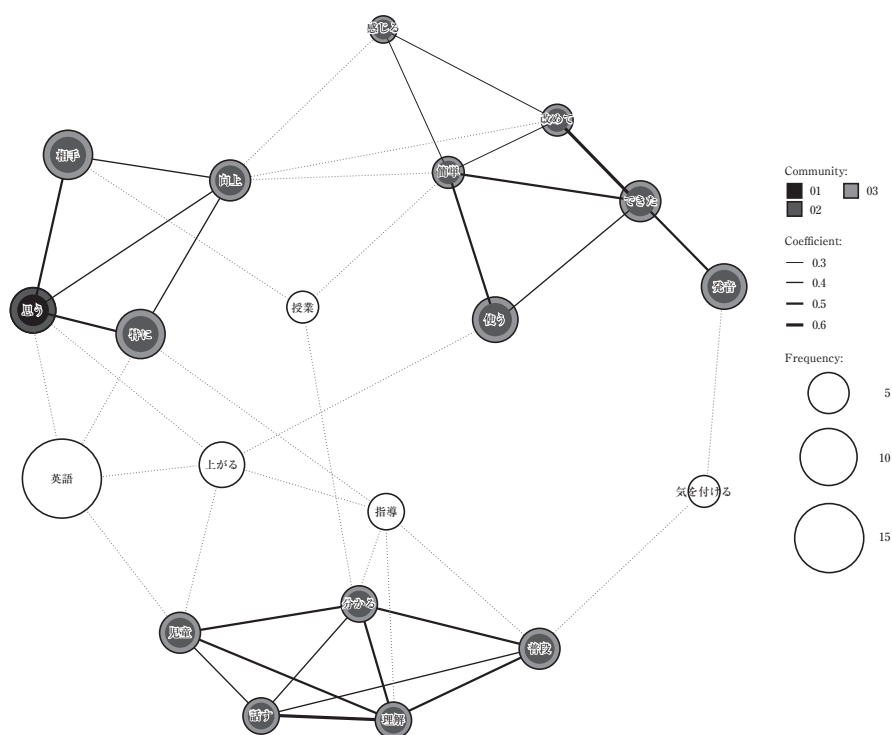


図8 問4「本指導を通して英語力が上がったと思いますか」に関する共起ネットワーク

#### ④ 英語力の向上

問4「本指導を通して英語力が上がったと思いますか」の結果は表3-5と図8に示したとおりである。自己評価得点はいずれも中点の2.5を下回り、あまり向上したとは思えないと感じたことが示された。両コースの得点に有意差はなかった。

表3-5 問4「本指導を通して英語力が上がったと思いますか」回答結果 (N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	2.39	4	1	0.71	
教員養成 (17名)	2.44	4	2	0.61	} 0.30
ELF (6名)	2.00	3	1	0.82	

表3-5のどちらかと言えば上がらなかったという結果になった理由についての自由記述文の分析結果を読み解くと、相手（児童）に合わせた英語は向上したと思う、理解できる英語を話した、簡単な英語を使った、発音には気をつけたことが抽出された。これに関する典型的な例を学生のコメントから挙げると、「簡単な英語を使っていたので英語力の向上は感じられなかったが、発音やイントネーションの重要性を改めて実感することができた」「内容的にも自分よ

りも低いものだったので、指導という点では得るものは多くあったが、英語力という観点では特に変化はないと思われる」というものだった。クラスルームイングリッシュの習得や指導案作成段階で何度も直された英語表現への言及は少なく、英語指導は発音も大切ではあるものの、語彙と表現があつてこそコミュニケーションが成り立つことに対する学生たちの意識の欠如が明らかになった。今後の学生指導への課題が示された。

報告書には「フラッシュカードを用意していたが、児童から尋ねられた予想外の単語を答えられず、語彙力不足を実感した」「児童は自分の発音をそのままそっくり真似するため、イントネーションや発音の正確さに気をつけなければならない」という反省が見られ「自身の英語力（正しい文法、とっさの語彙力など）に自信を失った」学生もみられる。

また「児童が質問に答えた時に“Good job”“Very nice”などの声掛けも、子ども達のやる気に繋がると感じ」「クラスで使える英語をもっと勉強して授業で使えたら」と気づき、クラスルームイングリッシュの必要性に気づいた学生もいることが分かる。

なお英語力向上については、3.4.2でも分析する。

#### ⑤ 英語指導の将来への有益性

問5「本指導は将来役立つと思いますか」の結果と考察を行う。結果は表3-6および図9に示した。自己評価得点は全体、両コースとも3.5以上となり、問1に次ぐ高い得点となった。コース間の得点に有意な差は見られなかった。

自己評価得点理由の分析結果(図9)では、5つのコミュニティが示された。どのコミュニティも繋がっており、ここで示されたもの全体がこの英語指導の有益性を実感する要素になっていると考えられる。細かく読み解いてみると、児童に直接教えられたことは将来教員になるにあたって良い経験となった。第2に、児童に興味を持ってもらえる教え方を考えたことは貴重な経験になった。第3に、教員志望であり今回の指導や模擬授業をとおして見えた課題は教育実習に役立つ。第4に、初めて作成した指導案と準備はとても大変だったと感じた。最後に英語は教育関係の仕事に限らず、通訳という仕事の可能性もあると考えた、となる。本プロジェクトでの経験は教員養成だけでなく、他のキャリアを考える学生にとっても貴重な学びの場となったことが示された。

報告書においても、教員志望の学生にとっては「教員の魅力を感じることができ」「教職に対する思いの強まる大きな一歩となった」ことが各自の言葉で生き生きと述べられている。例

表3-6 問5「本指導は将来役立つと思いますか」回答結果 (N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	3.83	4	2	0.48	} 0.26
教員養成 (17名)	3.94	4	3	0.24	
ELF (6名)	3.50	4	2	0.76	

# 学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか

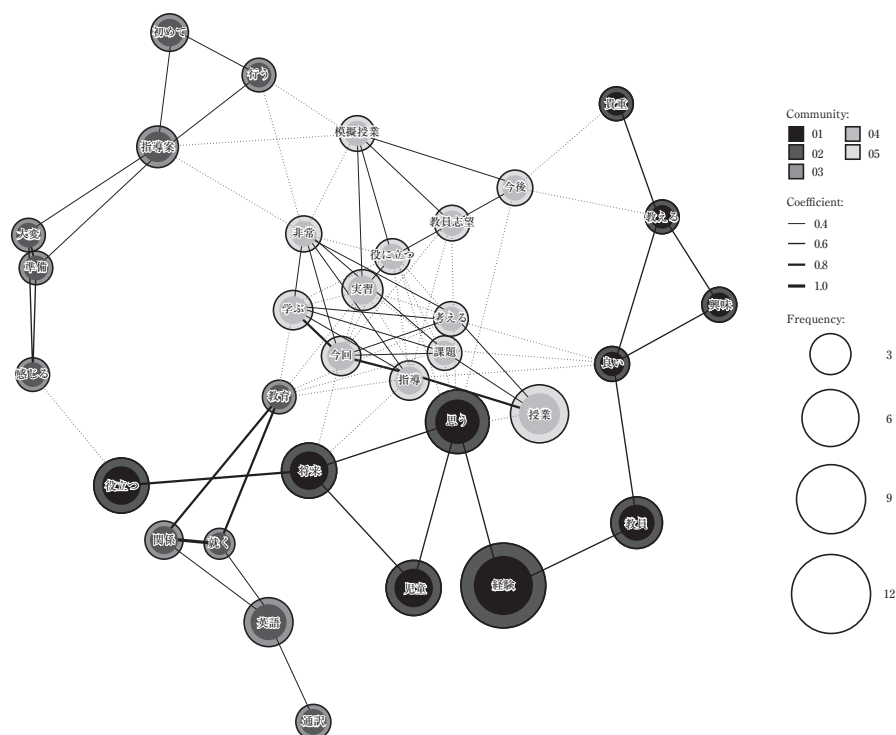


図9 問5「本指導は将来役立つと思いますか」に関する共起ネットワーク

例えば自分の力不足を思い知ったが「だからと言って（教師に）なりたくないと思ったか」というと逆である。下田小学校で授業するまでに、何時間もかけて準備してきたものが授業をして児童たちがとても喜んでくれているのを見てとてもやりがいのある職業だと感じ俄然なりたと思った。「教師として現場に携わる前にボランティアなどに積極的に参加し、子どもの実態や発達段階への理解を深めておくことが必要教職を目指している私にとって得られたことは数えきれないほど沢山あり」、「教師の仕事はこんなに準備が多く大変だが、やりがいのある魅力的な仕事だということを実感し」、「より一層勉学に励み、英語を頑張りたいという児童生徒のために、教師として活躍できる日を実現させたい」と夢を再確認し決意を新たにした学生が多い。

他方、教師を目指さない学生にも「自分の将来を見据えての学ぶ点が多くあった」ようだ。例えば「教師という職業の大変さ、難しさ、素晴らしさを知ることができた。自分が将来親になると考えたときに教師の大変さを知っているのと知らないのとでは雲泥の差があると感じた」と、教師という職業理解が深めた学生、あるいは「先生方が子供たちの良いところを尊重した教育を行っている姿を見て、私も人の良いところを見つけて、その良いところを尊重できる社会人になりたいと思った」と、人としてのあり方を学んだ学生がいた。

さらには「児童の視点と教師の視点、そして私たち自身の視点といった、様々な角度から物事を見ることができた。一つの考えに縛られず、多くの観点から見て考えが持てるようになり、

自分の視野が広がったと感じた。」同様に、英語指導を通して「児童の立場や目線になったつもりで物事を考えて進めていくことが大切だと学んだ。これは教師になるなら関係なく誰に対しても、その相手のことをよく考えて行動し真剣に取り組んでいくべきだと感じた。」と、視野の広がりを持てたことの有用性を感じている意見があり、大変興味深い。

#### ⑥ 英語指導の難点と利点

問6「本指導で難しいと思ったこと、うまくいったことは何ですか。それぞれについて具体例を挙げて書いてください」の「難しいと思ったこと」についてみていく。

この結果から、児童が分かる授業を作ること、発達段階やレベルに合った単語や文、アクティビティの準備、時間配分、児童が分かる授業を作ること、全体の反応をみて理解できるように指示や指導することに苦労したことがうかがえる。学生たちは日常的には児童について学んだり、児童と直接触れあったりすることがほとんどない。こうした背景がこの結果に表れていると考える。指導内容の単語や文（表現）を用意することへの言及もある。本プロジェクトでは通常のカリキュラムに沿うというよりは、水兵との交流への準備という位置づけであるため、既習事項を特に踏まえる必要はなく、授業内容は学生に委ねられている。そのことがかえって授業構成を考える際の手がかりが欲しかったと学生が感じることに繋がったのであろう。ここから学生には通常のカリキュラムの流れを踏まえた方が取り組みやすいということがつかめた。最後に、児童の注意を自分たちに向けさせ集中させることが難しかったことが挙げられている。事前訪問をして授業参観したかったとコメントしている学生もあり、過年度のビデオ視聴など今後の指導に取り入れるべき重要な示唆が得られた。なお具体的に学生が課題と感じた点は、先の②英語指導力の向上にも詳述した。

次に、問6の「うまくいったこと」だが、KH Coderでは5つのコミュニティが示された。

上記の結果から、臨機応変な対応、学習項目の定着、音楽を取り入れたり、ゲーム、ペアワークなど用意した活動を楽しんだりしてもらえたことであると感じていることが示された。事前調査では定着という表現が無かったが、事後調査で「定着」という表現が出てきたことは興味深い。実際「外国語活動」ではねらいは「慣れ親しむ」ことで「定着」は記載されていない（文部科学省、2009；110-112）。上述したとおり1日目の放課後に学級担任との振り返りの時間を設けたことから、活動に移る前に表現を定着させる必要性が指摘され、学生の意識に残ったとも考えられる。

特筆すべき点は、授業は2日目午後の水兵との交流会への準備という位置づけであったが、授業で教えた英語を児童が使ってくれているのを見て、本指導の当初のねらいどおりにやり遂げることができたという達成感が、前述①英語指導の有用性や③英語指導力に対する自信の向上だけでなく、ここでも表れていると捉えられる。これは本プロジェクトの最も大きなねらいの一つだっただけに、プロジェクト自体の成功ともとれる貴重なコメントである。



学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか

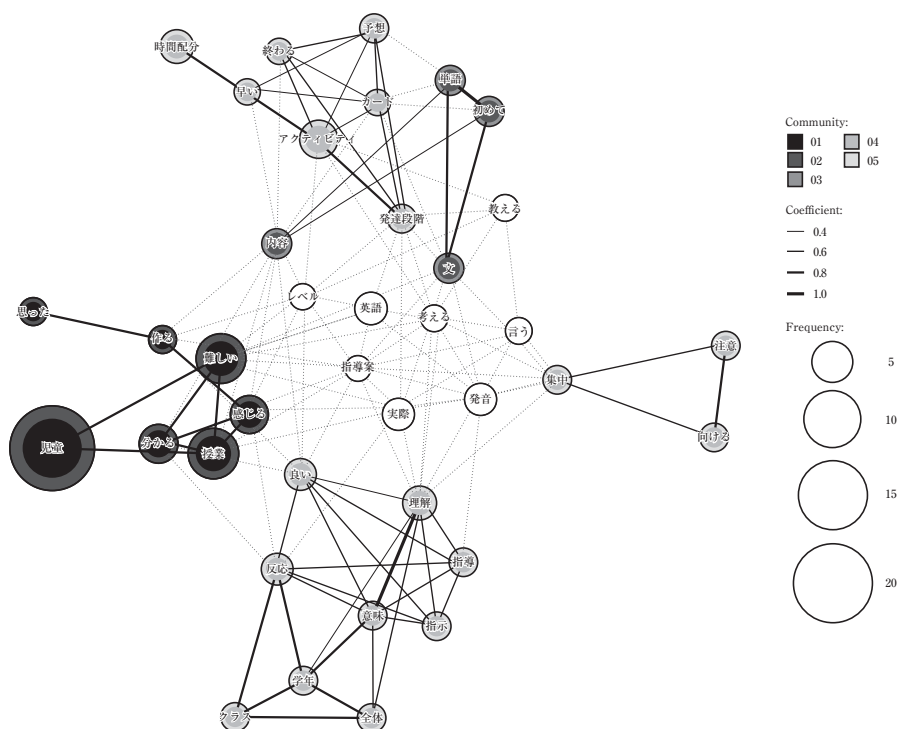


図10 問6「本指導で難しいと思ったことは何ですか」に関する共起ネットワーク

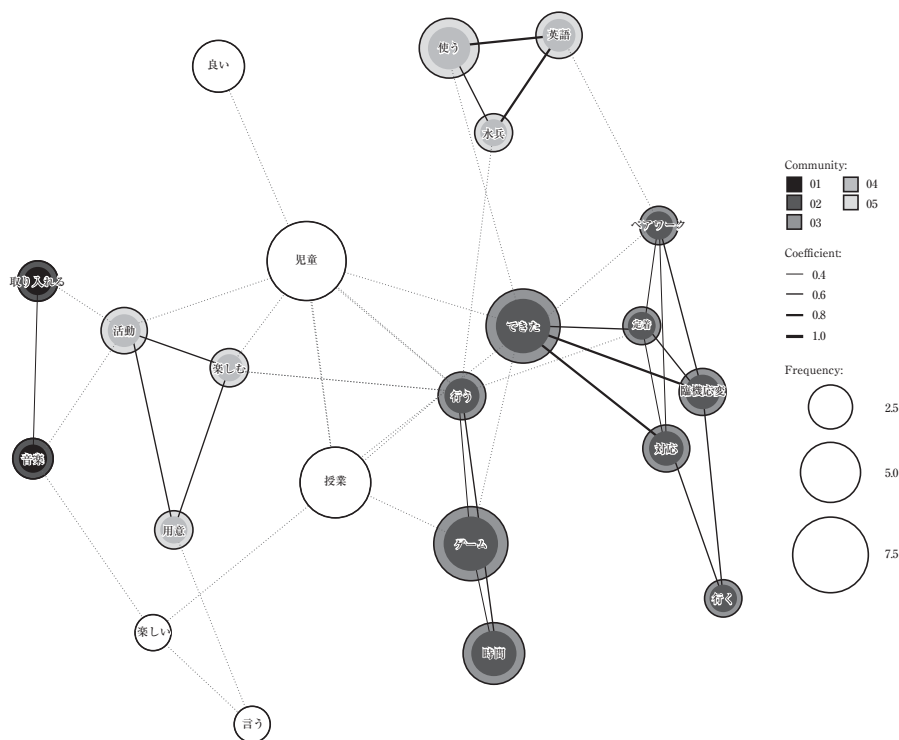


図11 問6「本指導でうまくいったことは何ですか」に関する共起ネットワーク

## ⑦ その他

問7では「その他何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由に書いて下さい」という指示をした。

KH Coderによる分析（図12）では3つのコミュニティが示された。そこからは、自分たちの経験からは今回の課題、つまり「水兵さんとのコミュニケーションを想定した英語指導」を思い描くことが難しく、文字通り五里霧中状態で不安に駆られる中で模擬授業に取り組んできたが、その甲斐あって、子どもたちが授業を楽しんでくれたことを感じ取れたと読み解けるだろう。改善すべきことは「英語」と「授業」と示されていることから、英語指導力および英語の運用力に改善の余地がまだあると感じたと読み取れる。

本節では事後アンケートの結果から考察を行った。結果からは本取り組みへの参加は教職志望の有無にかかわらず、どの学生にとっても非常に有意義なものであり、将来にも役立つと思えるプロジェクトであったことが示された。また、指導力については、自己評価得点は筆者の予想を超える高さとなったが、これは全くの知識や技能が無い中でここまでやり遂げられたという達成感の表れと肯定的に捉えることもできる。逆説的ではあるが、このことは自信は無い

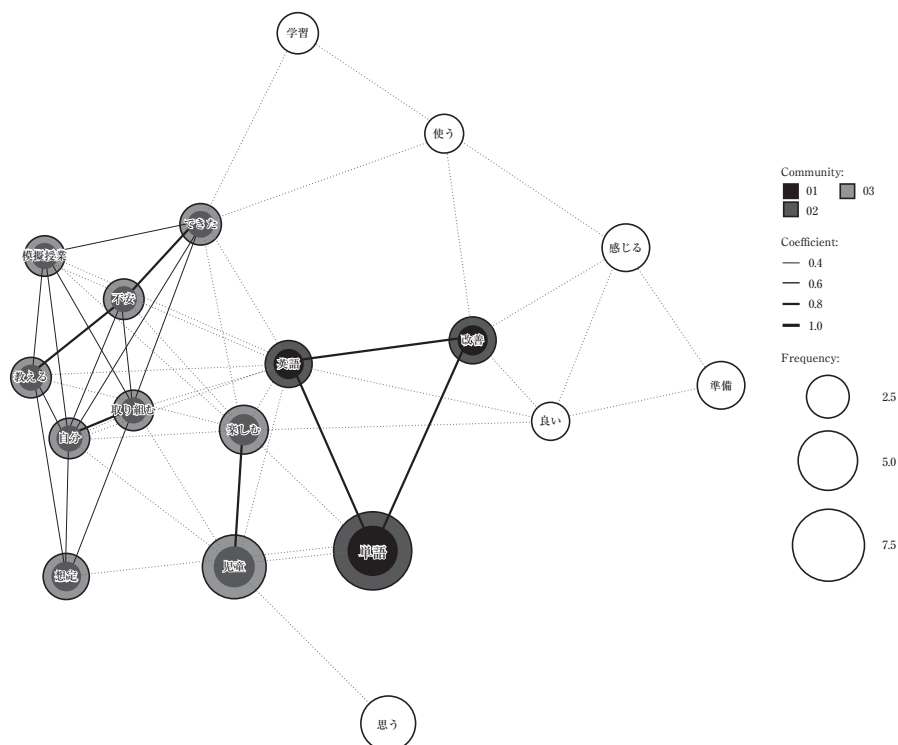


図12 問7「その他何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由に書いて下さい」に関する共起ネットワーク

という結果に裏付けられている。英語力については、期間が短い、(小学校英語で)簡単だったなどの理由から向上したという自己評価には繋がらなかった。問7にあるように英語力および英語指導力には改善の余地があること、また自分達の発音に課題があることに気づいたことが示され、今後これをいかに改善していくか大学の担当教員側の課題として浮き彫りになった。

### 3.2.2 授業実践自己評価：J-POSTLを用いて

前節の事後アンケートでは、英語指導実践に関する気づきや感想を中心に分析した。本節では、授業実践に関する詳細な観点から学生の学びについて検証していく。

授業実践から2ヶ月後に、学生はJ-POSTLの各項目の自己評価を5件法で評価し、その理由を記述した(資料3)。前節では教員養成コースとELFコースの学生には1項目以外有意差は見られなかったが、ここでは教職の専門性が強いことから両者に差が見られるかを確認するために、全体、教員養成コース、ELFコースの3つに分けて平均点を算出した。J-POSTLのうち、先行研究(米田, 2017)に基づき小学校英語教育実習の実践に直接関わると考えられる53個の自己評価記述文項目を用いた。なお、本プロジェクト用に一部表現を変更した(表内に\*を付けて表示)。以下、分野ごとに結果を示し考察していく。

「I 教育環境」分野の結果は以下のとおりである(表3-7)。「I 教育環境」分野では「C. 言語教師の役割」のうち、5番「他の実習生や教師からのフィードバックを自分の授業に反映させることができる」が最高点となった。前述したとおり、事前準備で他の学生たちと模擬授業を繰り返し切磋琢磨しあったことや、授業当日放課後の振り返りの際に学級担任から得られたフィードバックを翌日の授業で活かすことができたという気持ちの表れと考える。逆に一番低かったのが「B. 目標とニーズ」の2番の到達目標の設定であった。低い点を付けた学生の実理由としては「学習指導要領を見たことがない」ため要領に基づいた到達目標を考慮できなかったと考えられる。3点を付けた学生は、「学習指導要領には目を通さなかったが、児童が水兵さんとの交流のために必要な表現を身に付けられることを目標にしたため」という理由を書いていた。日頃接していない児童や学習指導要領を踏まえ、目標設定を立てること自体が難しかったことが示されたと言える。なお、コース間に有意な差は見られなかった。

「II 教授法」分野の結果は表3-8に示した通りである。「II 教授法」分野では、A「スピーキング活動」とC「リスニング活動」の1番で平均点が最も高くなった。実践が外国語活動であったため、口頭技能が中心になったためと考えられる。逆に2点台になったのがA-2、A-6、C-5となった。数字や色を言語材料にした授業が多かったものの、これらが児童の身の回りの事柄であるという認識が学生に無かったと考えられる。また、A-6「音声指導」については、前節でも示されたが自身の発音が課題だと気づいたことが、得点の低さの背景にあると考えられる。C-5についても言葉の特徴に気づかせるような活動よりは、タスクをこなすことを中心にした活動が中心となり、英語の特徴にまで学生自身気が回らなかったことが考えられる。加えて、英語学に関する授業を履修していないため意識化できていない可能性もある。

表3-7 I 教育環境：授業実践自己評価平均得点 (N = 23)

		全体	教員養成	ELF	t検定
B. 目標と ニーズ	1. 英語を学習することの意義を理解できる。	3.87	3.88	3.83	0.89
	2. 学習指導要領と学習者のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。	3.09	3.00	3.33	0.56
	3. 学習者が英語を学習する動機を考慮できる。	3.52	3.71	3.00	0.29
	4. 学習者の知的関心を考慮できる。	3.48	3.35	3.83	0.48
	5. 学習者の達成感を考慮できる。	3.91	4.12	3.33	0.19
C. 言語教師 の役割	2. 学習者の母語の知識に配慮し、英語を指導する際にそれを活用できる。	3.45	3.31	3.83	0.22
	4. 学習者からのフィードバックや学習の成果に基づいて、自分の授業を批判的に評価し、状況に合わせて変えることができる。	3.35	3.35	3.33	0.97
	5. 他の実習生や指導教諭からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。	4.22	4.24	4.17	0.80
	6. 他の実習生の授業を観察し、建設的にフィードバックできる。	3.57	3.65	3.33	0.51
	7. 計画・実行・反省の手順で、学習者や授業に関する課題を認識できる。	3.52	3.65	3.17	0.39
D. 組織の設 備と制約	8. 授業や学習に関連した情報を収集できる。	3.70	3.82	3.33	0.24
	1. 実習校における設備や教育機器を、授業などで状況に応じて活用できる。	3.39	3.24	3.83	0.25

注) 表内の番号 (1, 2等) はJ-POSTL内の番号を示す。欠番があるのは、本プロジェクトに関連しない項目は削除しているためである。

「Ⅲ教授資料の入手先」(表3-9)であるが、実践では学生たちが考えた教材や活動がうまく使えたグループが多く、その気持ちが1番と4番の得点に反映されていると考えられる。その一方で2番については、5, 6年生用教材の“Hi, Friends!”から選んだわけではないことが得点の背景にあると考えられる。一方、3番については教員養成コースが低かったのに対しELFコースは高い得点となっている。リスニング活動は教科書ではなく自分たちで選択・作成したという思いがあると考えられる。

「Ⅳ授業計画」(表3-10)では、A-2の自己評価項目でコース間に有意差が見られた(\* $p < 0.05$ )。本記述文(目標設定)で差が出た背景については現段階では把握できていないため、今後検証していく必要がある。自己能力項目で得点が高かったのは、第1にC-2の児童同士のやりとりを促進する活動計画の立案、第2にB-6の児童の関心を引き出すであった。B-6は前節の結果とも一致し、児童の楽しそうな様子からそのように判断をしたと考えられる。C-1の指導案の立案については、何度も指導が入り何度も書き直した結果、立案できるようになったという実感を持っていると考える。一方、担当教員としては、形式は整ってきたものの、英語

表3-8 II 教授法：授業実践自己評価平均得点 (N = 23)

		全体	教員養成	ELF	t検定
A. スピーキング活動	1. 学習者をスピーキング活動に積極的に参加させるために、協力的な雰囲気を作りだし、具体的な言語使用場面を設定できる。	3.96	3.94	4.00	0.86
	2. 自分の意見、身の周りのこと及び自国の文化などについて伝える力を育成するための活動を設定できる。	2.91	2.88	3.00	0.85
	5. 強勢、リズム、イントネーションなどを身に付けさせるような様々な活動を設定できる。	3.35	3.35	3.33	0.97
	6. 語彙や文法知識などを用いて正確に話す力を育成するための音声指導ができる。	2.78	2.76	2.83	0.87
C. リスニング活動	1. 学習者のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。	3.87	3.76	4.17	0.32
	2. 学習者が教材に関心が向くよう、聞く前の活動を計画できる。	3.61	3.47	4.00	0.40
	3. 学習者がリスニングをする際に、教材のトピックについて持っている関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。	3.00	3.06	2.83	0.69
	5. 学習者に英語の話し言葉の特徴に気付かせるような活動を立案し設定できる。	2.61	2.41	3.17	0.22
E. 文法	2. 文法は、コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち、使用場면을提示して、言語活動と関連付けて指導できる。	3.39	3.29	3.67	0.42
F. 語彙	1. 文脈の中で語彙を学習させ、定着させるための活動を設定できる。	3.61	3.71	3.33	0.59
G. 文化	1. 英語学習を通して、自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を呼び起こすような活動を設定できる。	3.26	3.12	3.67	0.31

注) 表内の番号 (1, 2等) はJ-POSTL内の番号を示す。欠番があるのは、本プロジェクトに関連しない項目は削除しているためである。

表現やスペルミスなどが最後まで直り切らなかったと考えており、今後の指導案作成指導への課題が明確になった。

「V授業実践」ではA-4, C-1, D-1, D-2が4点台と高くなった(表3-11)。これらの項目は挨拶やペアワークといった学生たちが日ごろから慣れ親しんでおり、かつ実践しやすい項目であったため、得点が高くなったと考えられる。D-1については23名全員が5点中4点をつけている。ここで着目すべきはE-1の言語使用である。学生たちの得点は3.39と低くはないが、事実上、アクティビティの説明が日本語になってしまい、「必要に応じて日本語を効果的に使用」するはずが、逆に英語を時々使うという授業が見られた。学生のコメントの中には、英語力が

表3-9 Ⅲ教授資料の入手先：授業実践自己評価平均得点 (N = 23)

	全体	教員養成	ELF	t検定
1. 学習者の年齢, 興味・関心, 英語力に適した教科書や教材を選 択できる。	3.83	3.71	4.17	0.30
2. 学習者の英語力に適した文章や言語活動を教科書から選択できる。	2.61	2.71	2.33	0.50
3. 教科書以外の素材から, 学習者のニーズに応じたりスニングの 教材を選択できる。*	2.96	2.76	3.50	0.07
5. 学習者に適切な教材や活動を考案できる。	3.83	3.76	4.00	0.47

注) 表内の番号 (1, 2等) はJ-POSTL内の番号を示す。欠番があるのは, 本プロジェクトに関連しない項目は削除しているためである。

\*本プロジェクトを用い一部修正した項目

表3-10 Ⅳ授業計画：授業実践自己評価平均得点 (N = 23)

		全体	教員養成	ELF	t検定
A. 学習目標 の設定	2. 2回の指導計画に即して、授業ごとの学習目標を設定できる。*	3.87	3.71	4.33	0.04*
	3. 学習者の意欲を高める目標を設定できる。	3.57	3.41	4.00	0.20
	4. 学習者の能力やニーズに配慮した目標を設定できる。	3.17	3.06	3.50	0.40
B. 授業内容	2. 言語や文化の関わりを理解できるような活動を立案できる。	2.61	2.35	3.33	0.15
	3. 文法学習や語彙学習をコミュニケーション活動に統合させた指導計画を立案できる。	3.74	3.76	3.67	0.74
	4. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して、指導計画を立案できる。	3.13	3.24	2.83	0.42
	5. 学習者がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。	2.96	2.88	3.17	0.56
	6. 学習者のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。	4.04	4.18	3.67	0.09
	8. 学習者の反応や意見を、授業計画に反映できる。	3.22	3.06	3.67	0.11
C. 授業展開	1. 学習目標に沿った授業形式をえらび、指導計画を立案できる。	3.57	3.65	3.33	0.45
	2. 学習者の発表や学習者同士のやりとりを促す活動計画を立案できる。	4.09	4.18	3.83	0.52
	3. 英語を使うタイミングや方法を考慮して、授業計画を立案できる。	3.52	3.47	3.67	0.54
	4. 友人とのティームティーチングの授業計画を立案できる。*	3.96	3.82	4.33	0.22

\* $p < 0.05$

注1) 表内の番号 (1, 2等) はJ-POSTL内の番号を示す。欠番があるのは, 本プロジェクトに関連しない項目は削除しているためである。

注2) \*本プロジェクトを用い一部修正した項目



表3-11 V授業実践：授業実践自己評価平均得点（N = 23）

		全体	教員養成	ELF	t検定
A. レッスン・プランの使用	1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。	3.65	3.71	3.50	0.55
	2. 指導案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行とともに学習者の興味・関心に対応できる。	3.65	3.71	3.50	0.69
	3. 学習者の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。	3.43	3.35	3.67	0.50
	4. 本時をまとめてから授業を終了することができる。	4.22	4.29	4.00	0.49
	5. 予期できない状況が生じたとき、指導案を調整して対処できる。	3.30	3.41	3.00	0.57
B. 内容	1. 授業内容を、学習者の持っている知識や身近な出来事や文化などに関連づけて指導できる。	3.48	3.35	3.83	0.27
C. 学習者とのインタラクション	1. 授業開始時に、学習者をきちんと席に着かせて、授業に注意を向かせるように指導できる。	4.00	4.18	3.50	0.26
	2. 学習者中心の活動や学習者間のインタラクションを支援できる。	3.87	3.94	3.67	0.57
	3. 可能な範囲で、授業の準備や計画において、学習者の参加を奨励できる。	3.13	3.00	3.50	0.52
D. 授業運営	1. 個人学習、ペアワーク、グループワーク、クラス全体などの活動形態を提供できる。	4.00	4.00	4.00	1.00
	2. フラッシュカード・図表・絵などの作成や視聴覚教材を活用できる。	4.61	4.59	4.67	0.77
E. 教室での言語	1. 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。	3.39	3.47	3.17	0.54
	2. 学習者が授業活動において英語を使うように設計し指導できる。	3.74	3.76	3.67	0.84

注）表内の番号（1, 2等）はJ-POSTL内の番号を示す。欠番があるのは、本プロジェクトに関連しない項目は削除しているためである。

向上しなかったのは、「(授業時の) 英語使用率があまり高くなかったから」というのもあった。今後の学生指導の課題として浮かび上がった。

以上、本節ではJ-POSTLの学生による自己評価得点と記述文を用いて本プロジェクトの英語指導実践力を検証してきた。調査結果から、学生たちは「子どもたちが楽しんでくれたから成功したと思う」や「ペアワークがうまくいった」などの分かりやすい項目では得点が高く、発音や文法、文（表現）等言語材料になると低い得点を付ける傾向が確認され、今後、目に見える活動だけでなく、指導内容にも注意を払わせる必要性が確認された。同時に、指導案作成で何度指摘されても修正されなかったのも英語表現であった。IV-C-1「形式に沿った指導案の

立案」についてはできていると考えていることから、学生にとっては指導案と言語材料やクラスルームイングリッシュなど英語表現は別物と捉えている可能性が示された。今後の指導上の課題である。

指導案の作成も学んでいない学生たちにとっては、ハードルの高い実践であったことは確かである。その一方で、実践させてくださった受け入れ校の児童にとっては貴重な2時間である。学生の実態と現場の要望や実態を踏まえ、今回明らかになった課題に大学側担当者は取り組んでいかねばならない。

### 3.3 学級担任からの英語指導に関するフィードバックと今後の指導への示唆

#### 3.3.1 学級担任からの英語指導に関するフィードバック

本プロジェクトでは3.2.1で先述したとおり、受け入れ校が1日目の授業後に全学級担任が学生たちに良かった点や改善点などを話し合う時間を設け、翌日の授業に向けて助言を行ってくださった。学級担任からの助言を受けて学生たちは2日目の指導改善に臨み、前述のような自己評価に至った。そこで本節では学生たちがどのようなフィードバックを受けたのかを見ていく。本フィードバックは、それぞれの学級担任が2回の授業ごとに良かった点と改善すべき点についてまとめたものを抜粋した（資料4）。本節では学級担任から寄せられた学生の授業に関するフィードバックについてみていく。

良かった点として挙げられているのは、児童の興味を引く教材・教具の工夫、音楽やリズムなどの工夫、学生たちの一生懸命な態度、臨機応変な対応、そして助言を受け入れて改善したことである。具体例は以下のとおりである。

- ・放課後の振り返りでは、授業内容を具体的に、的確に振り返ることができていた。
- ・大学生も一生懸命子どもたちと関わっており、子どもたちも非常に楽しんで取り組んでいた。楽しく活動する中で、What's your name? My name is ~のフレーズを身に付けることができた。
- ・名刺交換ゲームでは、子どもたち一人一人の名刺と名刺入れを大学生が作成してくれてあり、子どもたちは楽しく活動することができた。

改善すべき点として挙げられていたのが、発達段階や既習事項を踏まえることや集団をまとめる統率力、時間配分であった。

- ・5校時ではしゃぎすぎて眠くなったり、指示に従わなかったりする子もいた。
- ・5時間目の授業で、机とイスを後ろに下げて活動していた。その際、子どもたちが立ったまま話をしたり、指示をしたりすることが多かったので、集中が続かないこともあった。
- ・フロアでの活動だったので、ルールがない中だと活動が広がりすぎた場面も見られた。
- ・音声だけだったので、児童の中には、言い方や言葉の習得に困難な子がいた。
- ・活動の時間が長かったので後半は少し集中が切れてしまっていた子どももいた。また、一度

名刺交換ゲームの説明をしてから、前時の復習の時間に入ったので、子どもたちにもう一度説明しなくてはいけなくなっていました。

### 3.3.2 フィードバックから得られた今後の指導への示唆：J-POSTL との比較から

これらの課題を今後の指導にどのように活かしていくべきかヒントを得るため、フィードバックの内容をJ-POSTLの5分野と照合した。その結果、すべての分野が網羅されていることが示された。代表的なコメントと対応する自己評価項目の番号を以下に示す。なお、指導案は学級担任からのコメントではないが、指導上重要な要素なので以下に含める。

#### I 教育環境

- ・指導案への反映（A-1, A-2, C-5他）
- ・1日目の反省を生かし、1度座らせるなど、学生が工夫してくれたので指示が通りやすくなった。（C-5）

#### II 教授法

- ・イラストとジェスチャーを結びつけて何回も発音したので、子どもたちにとってはわかりやすく、スポーツの名前を英語で元気よく言うことができた。（C-1, 2）

#### III 資料

- ・学生の作ってきてくれたドラえもん、キティちゃん……などのカードで、英語で仲間集めをした。作ってくれたカードが子どもに人気で、子どもは喜んで取り組んだ。英語にも慣れて、自信をもって言えるようになった。

#### IV 授業計画

- ・子どもたちが1～10の英語は予想よりすらすらと言えたため、ゲームの時間を増やしたり、じゃんけんをしたりと、活動を工夫してくれた。（A-2, 3, 4; B-3, 4, 5, 6, 8; C-1, 2, 3, 4）
- ・子どもがやってみたくなる活動だった。指導者のデモンストレーションや、教具の工夫により子どもたち一人ひとりが楽しんで行っていた。（A-2, 3, 4; B-3, 4, 5, 6, 8; C-1, 2, 3, 4）
- ・最後に、一人ひとりが指導者のところに行って英語で数字を言うテストをし、個々にふれあうこともできていた。（A-2, 3, 4; B-3, 4, 5, 6, 8; C-1, 2, 3, 4）

#### V 授業実践

- ・1日目に不十分だった、my favorite ～のフレーズを何度も練習してからアクティビティに入っていたのがとても良かった。また、途中でそれでも言い方がわからない様子が見られたときに、一度活動を中断してもう一度my favorite ～のフレーズを確認しながら展開していたのがすばらしかった。（A-3）
- ・ハンバーガーの部品が、とても良くできていて、子供たちは出来上がりに満足していた。（D-2）
- ・時間の使い方も適当だった。（D-3）

1日目の学生の指導は「若さで押し切ったと言っても過言ではない」という言葉も聞かれたほど課題が多かったが、辛抱強く見守り助言して下さった学級担任のコメントにより、2日目は大きく改善した。ここで得られたコメントは来年度以降継承していく後輩学生たちにとっても、担当教員にとっても大変貴重なものである。子どもたちを前にきらきらと輝き指導する一生懸命さや柔軟さという学生の長所を生かしつつも、若さだけではない質の良い指導ができるよう、今回得られた示唆を指導に活かしていきたい。

### 3.4 水兵・児童との市内ウォークラリー活動に関する効果検証

本節ではウォークラリー活動について述べていく。ウォークラリーとは、水兵2～3名と児童2～3名（下田小の5-6年生の希望者）、学生2～3名がチームとなり、下田市内の歴史史跡等を2時間程度かけて歩いて回るというプログラムである。今年度は名所ごとに学生が問題文を英語で読み上げ、児童が選択肢を伝え、水兵に答えてもらうというクイズ形式を取り入れた。正解すると水兵のシートに児童がサインするという仕組みにした。児童の英語力は限られているため、学生は水兵と児童の会話の橋渡しをしながら交流を楽しませるという任務を持っている。

#### 3.4.1 水兵・児童との交流活動の意義

問1「水兵さんとの交流は自分にとって有意義でしたか」については、全員が4点中3～4点を付けた（表3-12）。コース間の得点に有意差はなかった。

表3-12 問1水兵さんとの交流は自分にとって有意義でしたか（N = 23）

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体（23名）	3.83	4	3	0.38	
教員養成（17名）	3.81	4	3	0.38	} 0.92
ELF（6名）	3.83	4	3	0.37	

上記の理由（自由記述）をKH Coderにより分析した（図13）。この分析結果から、交流をとおしてネイティブスピーカーが話す実際のスピードに触れ、英語を勉強する必要性が実感できた、（英語教育学科学生が2年次秋学期～春学期まで全員参加する）留学を前に大変だったのがよい経験になった、児童と水兵との会話を取り持つという経験ができたを読み取ることができる。この他、報告書の記述でも、自身の英語力を試すよい機会であった点や、普段関わることのない水兵とも交流ができた点が挙げられており、概して、普段学外で外国人と英語で会話する機会が少ない学生にとっては、会話を楽しみながら町を観光でき、かつ英語の勉強にもなり、とても有意義だったことが分かる。

さらには児童が学生による授業で習った単語やフレーズを活用し水兵との交流に役立ててい

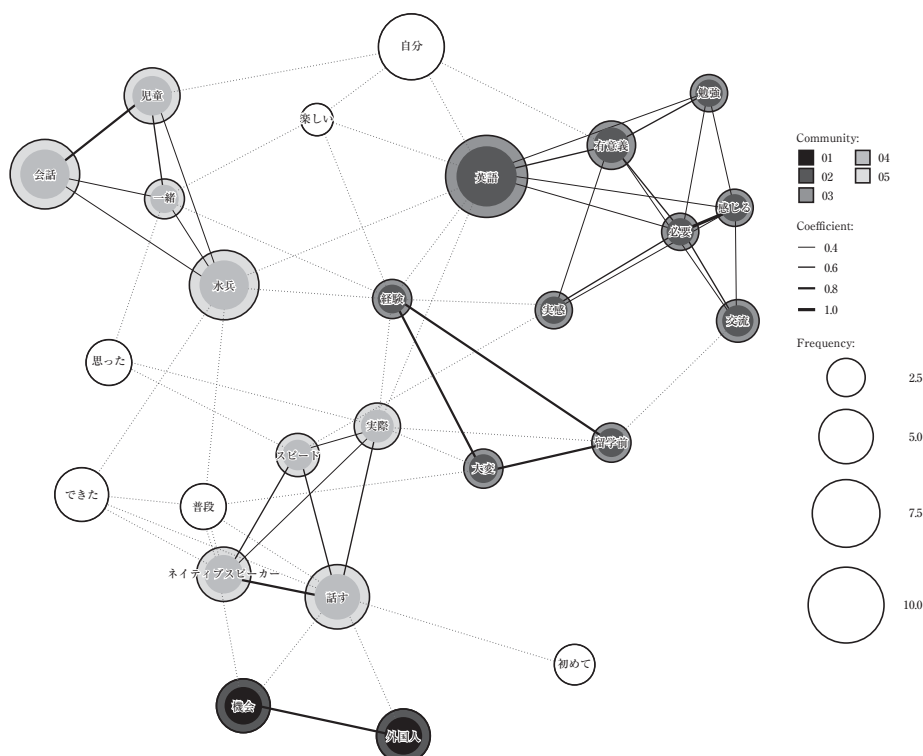


図13 問1「水兵さんとの交流は自分にとって有意義でしたか」に関する共起ネットワーク

た点（「授業で教えた「何色が好きですか」という表現を使って会話をしている女の子がおり、水兵に伝わった時の喜んだ顔は忘れられず、私もとてもうれしく感じた」「児童が授業で扱った文法や単語を使いながら、水兵と話せていたことにやりがいを感じた。私たちが行った授業の内容が、子どもたちに身についていたことを嬉しく思った。児童是水兵と話せて楽しかったと言っていた」「練習通りにいかなかった部分もあったが、水兵と会話するとき児童が授業で学習したフレーズを使っていたのを見かけた。その時は本当に嬉しくやりがいを感じた」）は特に大きなやりがいと達成感を学生に与えていた。児童と水兵の仲立ちがうまくいったこと（「児童と水兵が仲良くなり、終始笑顔がはじけて、両者ともとても楽しんでいる様子だったので非常にうれしく思った」）により、学生も強いやりがいを感じ、純粋にこの交流を楽しめたようだ。

### 3.4.2 英語力の向上

事前準備では授業準備にはほぼ全ての時間がとられたため、ウォークラリーの準備はほとんど現地でいった。そのため水兵と交流した数時間で英語力の向上が見られたかと問うこと自体が無謀ではあるが、水兵との交流で英語力についてどう感じたかを知るために、英語力について問うた。表3-13の結果からは中点の2.5を超え肯定的な傾向が示された。

表3-13 問2水兵さんとの交流を通して自分の英語力が上がったと思いますか (N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	2.74	4	1	0.79	} 0.54
教員養成 (17名)	2.69	4	2	0.68	
ELF (6名)	3.00	4	1	1.00	

表3-13の結果を踏まえて図14を分析すると、児童と水兵が話すのを助けることができた、話す内容を聞き取ることができた、自分の英語力や語彙力が分かった、話の内容を通訳できたという項目が抽出された。その一方、英語力向上について自己評価が低いことから、語彙力・表現力のなさに焦るばかりだった、児童のサポートで手一杯だった、自分の足りないところがよくわかったと感じている学生の姿が浮かび上がった。

ある学生は報告書に、自分の英語を日本在住の水兵が日本人慣れしていない水兵に伝え直すという場面があり、自分の英語は日本人慣れした人にしか通じないという現実を見せつけられてショックだったと告白している。学生は大学の英語関連授業で多様な国籍の先生方<sup>4)</sup>と日頃から接することで外国人との英会話に慣れてはいたが、今回の水兵との交流は自分たちの想定以上に難しく、多少あった自信も打ち砕かれたようだ。学生は、学内の英語教員は学生のレベ

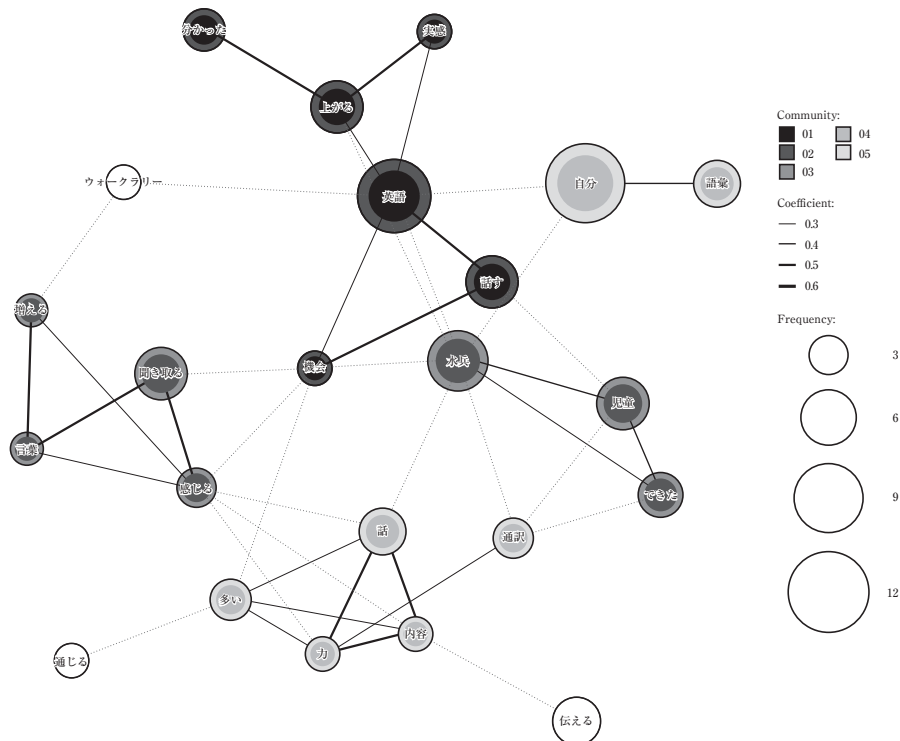


図14 問2「水兵さんとの交流を通して自分の英語力が上がったと思いますか」に関する共起ネットワーク



ルや語彙力に合わせた英語を使い、学生の発音にも慣れていて拙い英語でも理解しようとしてくださっていることに気づき、学外の一般のネイティブスピーカー相手にはそうはいかないことを学んだようだ。

また自身の英語力不足について「あらためて英語の必要性和私の英語力のなさを痛感させられた。何よりも悔しかったのが、ウォークラリーの最中に水兵さんに飽きさせてしまったことだ。もっと英語力があれば楽しませることができたのに、したくてもできないことがもどかしかった」「児童と水兵さんの会話のキャッチボールが、なかなか続かないと感じたので、ボキャブラリー・使える質問文を増やしておけばもっと会話が弾むのではないか」といった反省や、「児童と水兵さんの間に入って通訳するのが楽しかった。しかし、自分の英語が乏しくて通じない時があり、悔しい思いもしたので、英語を勉強し続けようと思った」という新たな決意も多く見られた。

反対に自己評価が高い理由には「通訳の仕事ができた」「リスニングの実践になった」「会話を楽しめた」などがあり、自信に繋がった学生もいれば、「わからなかったことを事後に調べ、語彙・表現力が増えた」と当日の悔しさをすぐに学習に活かしている学生もいた。

英語力やコミュニケーション力がある学生は難なく交流できていたことから、今後はネイティブスピードに慣れるといった英語力強化を含めたウォークラリーの準備が必要といえよう。

### 3.4.3 交流活動の将来への有益性

問3は「水兵さんとの交流は将来役立つと思いますか」である。結果は平均3.52で高かったものの、最小値に2点があった（表3-14、図15）。

表3-14 問3「水兵さんとの交流は将来役立つと思いますか」(N = 23)

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	t検定
全体 (23名)	3.52	4	2	0.58	} 1.00
教員養成 (17名)	3.50	4	3	0.50	
ELF (6名)	3.50	4	2	0.76	

表3-14および図15からは、留学前に水兵／ネイティブスピーカーと英語を使う経験ができた、英語の先生のスピードとは異なることを知った、将来人と関わる上で役に立つという結果が抽出された。「あまり馴染みのない職業の方と交流できた経験は貴重で、様々な人と関わりを持つという点において役立った」という記述も見られた。

それ以外にも視野の広がり（「水兵とのコミュニケーションを通して普段は触れることができない水兵の出身国の歴史的背景や文化を知ることができ、視野が広がった」）を実感した学生や、「子どもたちの『英語を使ってみよう』という熱意のおかげでコミュニケーションをとるための手助けをできたと感じた。子どもの可能性と懸命さに触れ、子どもの背中を押してや

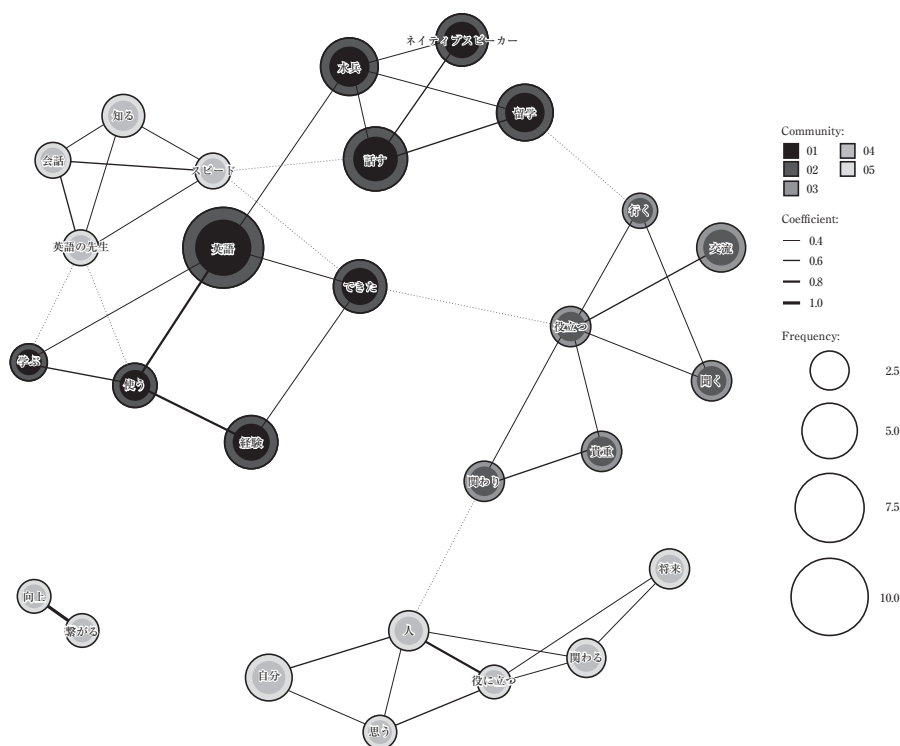


図15 問3「水兵さんとの交流は将来役立つと思いますか」に関する共起ネットワーク

ることの出来る存在になりたいと改めて感じる事ができた」と将来の夢を再確認できた学生もいることが、報告書の記述から読み取れる。

### 3.4.4 交流活動の難点と利点

問4では「本交流で難しいと思ったこと、うまくできたと思うことは何ですか。それぞれについて具体例を挙げて書いてください」に対して回答してもらった。まず、難しいと思ったことから見ていく(図16)。

まず、水兵と児童との通訳や関わり方、自分のリスニング力不足で会話ができなかった・単語と発音に課題があり伝わらなかった、話したり聞いたりするのは大変で質問に工夫が必要だった、の3点が抽出された。水兵と児童という通常接点のないところに自分たちが橋渡しをするという役割の難しさがにじみ出ている。実際英語での苦勞に加えて、水兵側に子どもへの慣れの有無による対応の違いがあり、児童側にも積極性に差があるため、人見知りする児童に会話に参加させる工夫が必要だったり、両者の特性を現場で知り、なおかつコミュニケーションのための話題を探さねばならないことや、事前調査はできない(水兵は当日変更になる場合もある)という制約もあり、かなり負荷がかかったことが示された。報告書においても「小学生と水兵さんの通訳をし、その大変さを学んだ。英語で言いたいことがいえないことが多々あっ

学生は小学生に対する英語指導から何を学んだのか

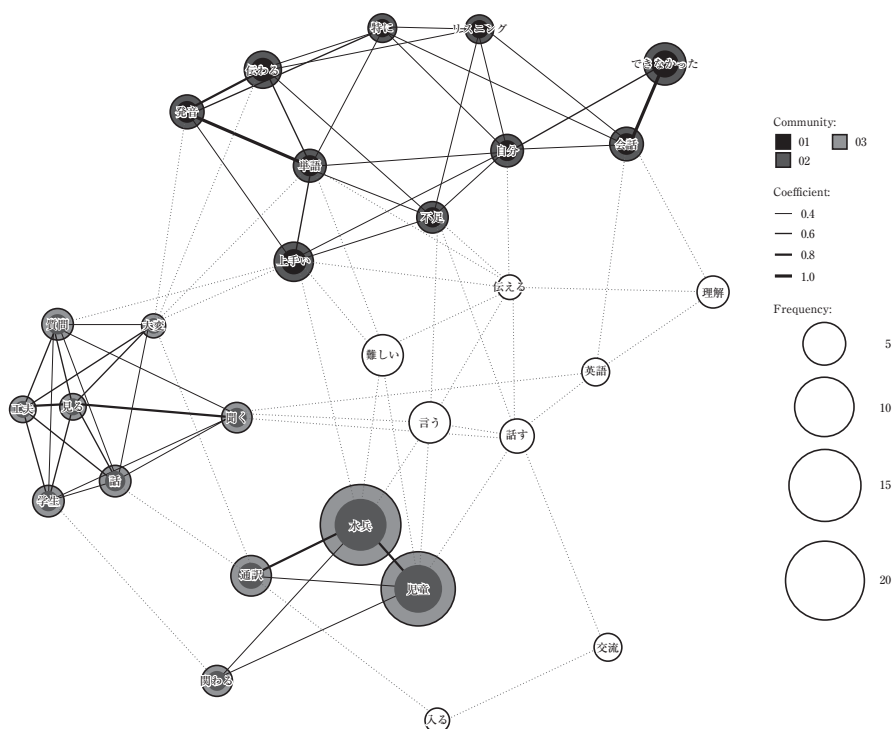


図16 問4「本交流で難しかったこと」に関する共起ネットワーク

た」「水兵さんと子どもたちの交流をもっと増やしてあげられたらよかった」等の反省から、「児童が安心して水兵さんとお話できるよう、学生がしっかりサポートする必要がある。例えば自己紹介や英語で質問をする練習をさせると良いと考える」「英会話でなくとも歌やゲームなどいろんな交流方法がある」「下田について詳しく事前に学習しておくとい」といった今後に役立つ具体的な提案が挙げられている。

次に、「うまくできたと思うこと」(図17)を見ていく。難しかったこととは裏腹に、水兵と児童との会話や交流、説明などが英語でできた、緊張し難しさはあったものの笑顔で伝えることができた、上手くいって楽しかったという、困難を乗り越えた満足感が表れている。その満足感には「子どもたちと水兵の仲立ちを英語面だけでなく会話しやすい環境作りの面からも貢献できた」「緊張していた児童のサポートに入ることができ、児童自ら英語で水兵さんに質問できていた」「この交流で英語にすごい興味を持ってくれた児童がいたことは非常にうれしかった」等が含まれている。「半分反省、半分自信になった」というコメントが象徴するように、困難さとうまくできたという感情がコインの両面のようなものであったことが伺える結果となった。

一方、「水兵さんに下田の文化を理解してもらえた」など、水兵および下田を初めて訪れた学生自身も、下田への関心が高まったことも一つの成果である。

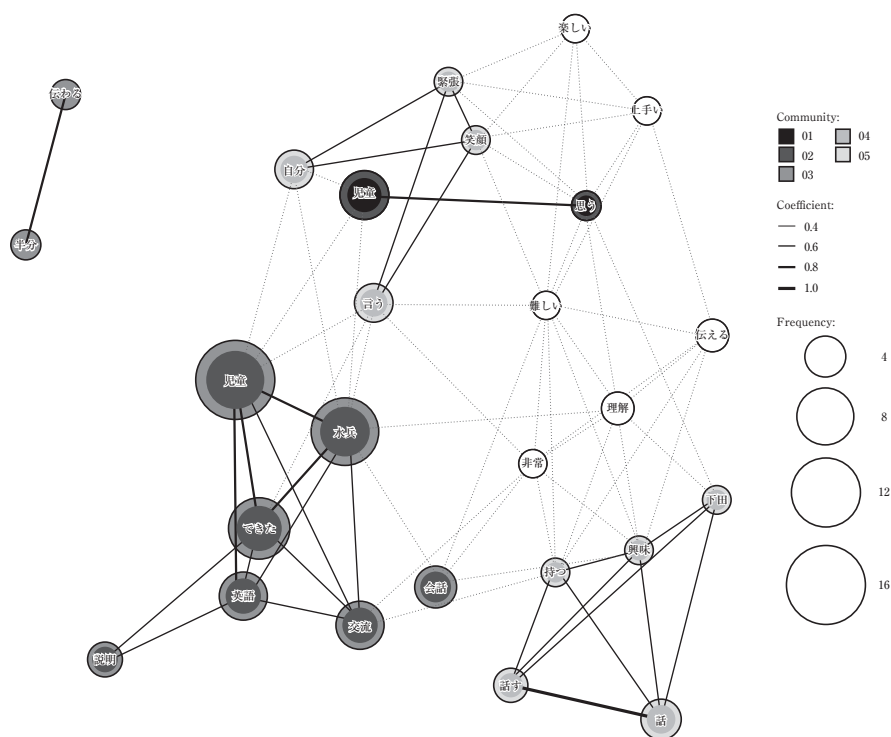


図17 問4「本交流でうまくできたと思うこと」に関する共起ネットワーク

以上、本節では水兵・児童との交流についてみてきた。学生たちは水兵という大学の英語教員とは違う職種・話し方・スピードに衝撃を受けたことが明らかになった。日本人に慣れていない人たちとの交流は留学を3か月後に控えた学生には大変有意義なものだったようだ。

普段とは違う英語に触れ自分自身が焦っているところに児童にも対応しなくてはならないという役割に、準備をもう少しすべきだったというコメントもあった。前述のように当日までどのような水兵が参加するのか、どの児童と組むのかも分からない中での準備を今後いかにしていくかが検討課題である。

### 3.5 プロジェクト全体に関する学生アンケート回答

最後にプロジェクト全体について自由に良かったことと改善すべき点について尋ねた。本節では、その2つの質問について述べていく。

### 3.5.1 本プロジェクト全体から学んだこと

問1「本プロジェクト全体を通して、英語力、英語指導力以外に、あなたが身についたと思う力や、学んだこと、将来役立ちそうな経験があれば、具体的に記入してください。」への回答を分析する。KH Coder分析であるが、他の質問と同じ設定では結果が煩雑で読み取りにく

くなったため、最小出現数：3、Jaccard係数0.3に変更した。

図18からは、仲間と協力して一つのプロジェクトに取り組むことの大切さを学ぶことができた、ペア学生との準備を周到にすべきこと、は読みとれるが、それ以外は多様な意見に分れており読み取りが難しい。そのため自由記述内容を精査した結果は次の通りである。なお問いに「英語指導力以外で」という断りがあるにも関わらず、ここでも児童への接し方、児童理解力（各2人）、学級経営の大切さ、教師の仕事の大変さとやりがいなどを数人が挙げていたが、指導力については3.2.1に詳述したためここでは割愛する。

第1に、記述の多かった個人的成長として、まず仲間との協力（8人）「仲間との切磋琢磨や相互作用が発揮できるおもしろさ」「仲間と協力して一つのものを作り上げることの大切さ」「一人ではほとんど何もできないと学んだ」「共に同じ方向を目指す仲間は大きな支えであったということに気づかされた」。次に、一つのことを成し遂げる達成感（3人）「何かをやり抜く経験はこれからも何年先も自信になるし、あの時できたからと自分を後押ししてくれると思う。本当によかった」、「練習中にはたくさんの苦労もあったが、本番での達成感もあり、本当に参加してよかった」、積極性（3人）「児童や水兵とコミュニケーションを積極的にとることの大切さ」「恥ずかしがったり、躊躇したりしては児童や水兵と良好な関係を築けない」、その他、視野が広がった（2人）「児童、教師と、多様な立場に立って物事を考えられるようになった

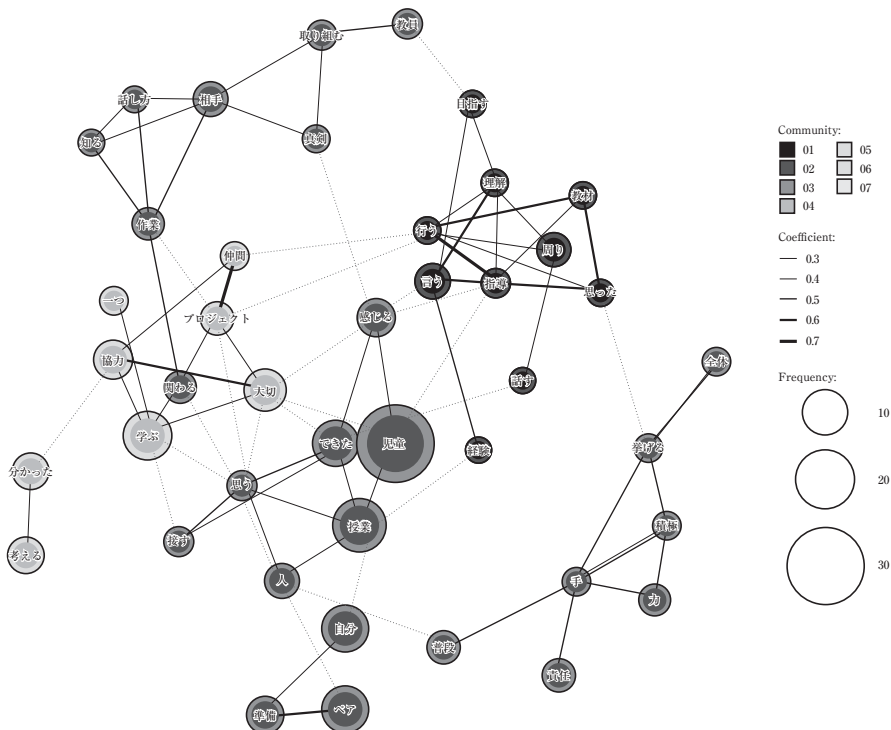


図18 問1「本プロジェクト全体を通して、英語力、英語指導力以外に、あなたが身についたと思う力や、学んだこと、将来役立ちそうな経験があれば、具体的に記入してください」に関する共起ネットワーク

た」「全体を見渡すことができる視野が身についた」。続いて、責任感（2人）、協調性、チームワーク、自主性、スケジュール管理力、コミュニケーション力等が挙げられた。

子どもたちに向き合いながら授業準備をする中で、子ども理解だけでなく自分自身についても考え、成長できた良い機会になったことも読み取れる。学生にとっては初めての経験が多く、負荷の大きかったプロジェクトを仲間と共に初志貫徹できた達成感を味わい、お互いに「高め合え」「何でも言い合える」仲間を得るという効果もあったことが明らかになった。

第2に、小学生の元気さや素直さに触れ、児童から学んだことも多数挙げられている。「児童たちは想像よりもずっと元気がよく、好奇心旺盛で、また彼らひとりひとりが違った個性を持っていた」「児童はみな元気で明るく、授業中の積極的な反応や姿勢などに私自身も見習うことがたくさんあった」「何事にも一生懸命取り組む児童を見て、私も見習わなければならないと痛感した」「児童は元気いっぱい積極的に自分の意見を述べていたので、私たちも日頃の授業でもっと自分の意見を言えるようにしたい」「子どもたちのどのような小さなことでも一生懸命に取り組む姿は、見ている人にも元気を与えとても輝いてみえた。私は消極的で受け身なところが多いため、そのようなところを見習わなければいけないと思った」など児童の姿を鏡として我が振りを直そうとする意見がいくつか見られたことは興味深い。さらには「子供たちの姿を見ながら、素直さや純粋さ、正直さが目に映ったが、純粋すぎるあまりに直接的に言葉をぶつける子供も多く、自分が親になったときにわが子に何を教えなければならないのかといったことが浮かんできた。」「児童たちの純粋な姿を～これから大人や教員になる私たちが守っていかなければならない」のように、大人や教員の視点から子どもへの使命を感じ取った学生もいた。

第3に、3日間指導者の立場で児童とふれあったことから、教師という仕事の大変さとやりがい、魅力についての記述が多く見られたが、これについては3.2.1に記したため割愛する。

第4に、大学から離れて実践現場で自分の力量を試した結果、自分の力不足を知り課題が明らかになったことをポジティブに捉えた意見も複数見られた。力不足の項目や課題についてはこれまでも触れてきたので、改善点について次節で整理していく。

このように多様で多くの学びを得られたのは、偏に学外でのアクティブ・ラーニングの効果であろう。学生たちは「普段の大学生活では得ることができない経験」から「現場に入らないと分からないことがたくさんあることを学」んだ。「今まで大学で学んではいたが、実際に自分でやってみると様々な発見があり、大学では学ぶことのできないことをたくさん学ぶことができた三日間であった。」学生の本プロジェクトへの満足度は非常に高く、「次の機会にもぜひ参加したい」という言葉が報告書に並んでいる。

### 3.5.2 本プロジェクトからの気づきと改善点

これまでも述べてきたとおり、本プロジェクトのそれぞれの過程で学生たちは苦労や失敗を重ね、力不足を痛感し、多くの反省点から自らの課題を見いだしている（3.2.1および3.4）。



これまでの記述をまとめると、事前準備段階では、指導案作成の難しさや模擬授業の練習不足から、準備開始を早くしより多くの時間をかけること、一人で悩まずペアや他の参加者と協力し一丸となってプロジェクトに取り組むことなどを改善案として挙げている。

本番では、3.2.1に詳述した様々な英語指導力の向上（多種の教授法を身につけることはもちろん、柔軟で臨機応変な対応力等も含む）、並びに水兵との交流で思い知った実践的英語力の習得（3.4.2）の2点が突出して重要な課題である。

問2「上記以外に何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由を書いて下さい。」では、問1同様分析結果が煩雑になったため、最小出現数を3、Jaccard係数0.2に設定した。図19より、改善点として準備には十分時間をかける、担当するクラスの情報を事前に得ておく、単語をあらかじめカードに書いておいたが想定外の意見が出てきて困った、ペアともしっかり練習してから本番に臨むこと等が読み取れる。

この結果の背景であるが、まず、準備のために時間をかけることは教師以外の仕事でも同様であるが、前述した調査結果にも示されたように、小学校英語ならば簡単だし遊べば良いという思い込みがあったのだろう。また「想定外は想定内」ということは指導していたものの、臨機応変な対応は大変だったことがうかがえる。

中には「自分のすべきことの優先順位を明確化し、責任を持ち、よく考えた上で参加を決

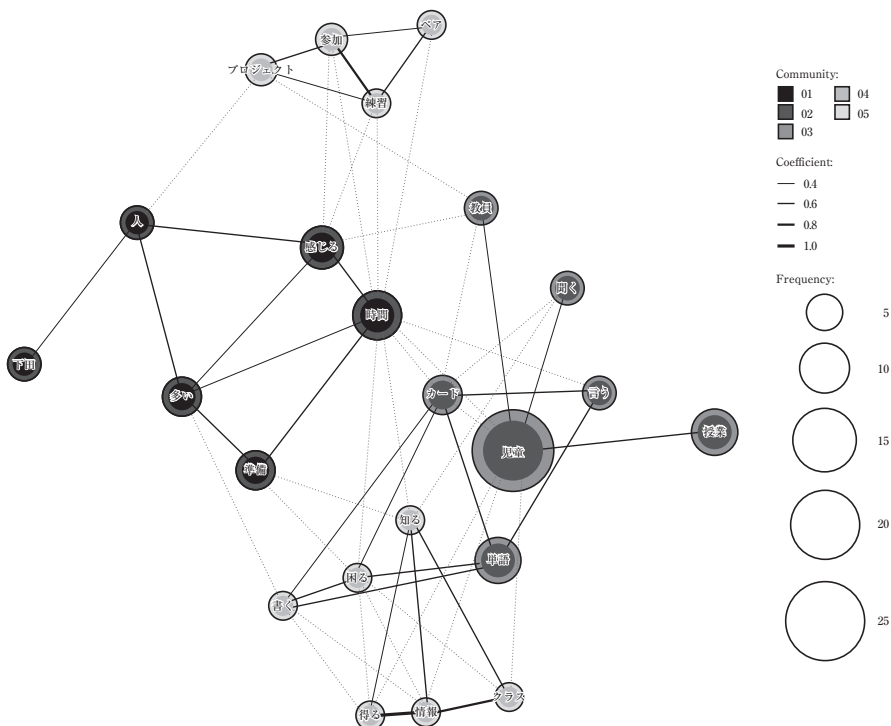


図19 問2「上記以外に何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由を書いて下さい」に関する共起ネットワーク

断してほしい」という意見もあった。本プロジェクトは「集中講義」のため時間割に組み込まれているわけではなかったのでアルバイトや部活動等を優先して準備を怠ったり、分担した仕事をしてこなかったりする学生がおり、人との共同作業の大変さを痛感し、次年度以降の参加学生には責任ある態度を望んでいるのだと考えられる。興味深かったのは、ELFコースではあるが、この経験から教師になりたいと思ったという意見もあり、学生たちにとって大きなインパクトのあるプロジェクトとなったことが確認できた。

最後に、「下田」「人」とあるように、気づいたことに挙げられたのが、下田の魅力である。「下田の文化や自然にも触れることができて下田が好きになった」「下田市の魅力をたくさん感じることができ、またここに来たいと思える時間を過ごすことができた」。また「民宿の方がフレンドリーで、あたたかい人が多いと感じた」「道に迷ったとき下田の人が優しくかった」とのコメントにあるように、下田市民とのふれあいも印象に残ったようだ。本プロジェクトでは校内での授業指導だけでなく、市内のウォークラリーという特殊な活動もあることから、下田の文化や歴史を学びつつ、市民との交流もできるという、非常に有意義な3日間であったことをあらためて確認できた。

#### 4. まとめ

本研究では玉川大学と下田市の地域連携協定の一部として行われた、通称「黒船交流プロジェクト」に大学生が参加するというアクティブ・ラーニングをとおして学生が何を学んだのか、質問紙調査や報告書等を用いて質的・量的に検証を行った。

事前調査から、学生たちは小学校英語では簡単な挨拶・ゲーム・歌を中心とした授業を経験しており、ここから小学校英語を「学び」よりは「遊び」「簡単」「楽しい」ものとしてとらえていることが明らかになった。小学校英語のねらいも「慣れさせること」と捉えている傾向が強く、英語は中学校から本格的に開始すると考えていることが示された。ここから、子どもが楽しいと思ってくれる授業が「成功」であり、そのために準備をしっかりとすると考えており、学びを中心に据えていないことが明らかになった。自信度についてはほとんどの学生が「小学生に教えたことがないから分からない」という回答であった。

事後調査の検証では担当教員作成の質問紙とJ-POSTL、学生が記した報告書や受け入れ校の学級担任からのフィードバックを用いて分析した。質問紙からは、英語指導や交流活動を行ったことは自分にとって有意義だったという結果が示され、将来教職以外のキャリアを考えているELFコース学生も含め、全員が非常に有意義であったと回答するなど、本プロジェクトへの評価は大変高かったことが示された。このようなアクティブ・ラーニングを通して、実体験を積むことの意義を再確認した結果となった。英語指導力向上については、指導案の書き方すら学んでいない段階での参加だったにも関わらず、児童に楽しかった、もっと英語を学びたいと思ったと言ってもらえたことから、今回の指導自体が彼らの能力向上であったと

捉えていることが読み取れた。一方で、指導に自信がついたかという点、多くの課題も明らかになったため、確たる自信にはならなかったことが示された。また、子どもたちは良い反応をしてくれ、自分たちもやり遂げはしたものの、課題も多く見つかったという結果が示され、自分自身の力を知る機会となったことが分かった。英語力の向上については、あまり向上したとは思えないと考えている傾向が示された。その要因として、小学校英語が簡単だったことや日本語での指示が多かったことが原因として浮かび上がった。一方、発音やイントネーションの大切さに改めて気づくことができたという点は英語力向上が今後期待できると考えられるが、英語表現についての言及がなかったことは、大学における指導上の課題として浮かび上がった。

J-POSTLを用いた分析に関しては、「I 教育環境」分野では「C. 言語教師の役割」のうち、他者のフィードバックを反映させることができる（C-6）という項目が最高得点となり、事前準備における仲間との切磋琢磨や、授業初日放課後の学級担任との振り返りの時間の有用性が反映されている。このことは学級担任からのフィードバックからも確認できた。逆に一番低かったのが「B. 目標とニーズ」の2番の到達目標の設定であった。

「II 教授法」分野では、「A. スピーキング活動」と「C. リスニング活動」の1番で平均点が最も高くなった。実践が口頭技能が中心になったためと考えられる。また、音声指導（A-6）については発音が課題だと気づいたというコメントどおり、低い評価得点となった。また、言葉の特徴に気づかせるような活動よりは、タスクをこなすことを中心にした活動が中心となり、英語の特徴にまで学生は思いが至らなかったことが示された。

「III 教授資料の入手先」では、学生たちが準備した教材や活動が実践でうまく機能したことが分かった。学級担任からのコメントでも魅力ある教材づくりが好評であった。「IV 授業計画」では、指導案立案と児童の関心を引き出すという項目の得点が高く、事後アンケートの結果とも一致し、児童の楽しそうな様子から判断したと考察された。一方で、指導案の立案については、何度も書き直して書けるようになったという実感を持っているようだが、実際には形式は整ったものの、英語表現やスベルミスなどが最後まで直らず、いかにそこに注意を向けさせるかが今後の課題として明確になった。

「V 授業実践」では挨拶やペアワークといった学生たちが日ごろから慣れ親しんでおり、かつ実践しやすい項目の得点が高くなった。ここで特に着目すべきは授業内の言語使用である。実践ではアクティビティの説明の大半が日本語になってしまい、「必要に応じて日本語を効果的に使用」するはずが、逆に「英語を時々使う」という場面が多く見られた。学生のコメントの中には、英語力が向上しなかったのは、「英語使用率があまり高くなかったから」と書いてあるものもいた。いかに授業内の英語使用率を高めるかは今後の課題である。

水兵・児童とのウォークラリー活動についても、非常に高い意義があったことが確認できた。大学の授業以外で外国人と英語で交流する機会が少ない学生には、会話を楽しみながら市内観光でき、かつ英語の勉強にもなった。特に9ヶ月に及ぶ留学を控えた学生にとっては実践的英語を試す貴重な体験となり、自身の英語力への自信を高めたり低めたり両方の効果があった。

児童が学生に習った英語表現を活用し水兵と交流できているのを確かめ、児童と水兵の仲立ちがうまくいったことにより、学生は強いやりがいや達成感を感じたことが認められた。

英語力やコミュニケーション力がある学生は積極的に楽しめた一方、反省しきりの学生もいる。ネイティブスピーカーの英語に触れ自分自身が焦っているところに、小学生にも対応しなくてはならないという役割は、想像以上に難しかったようだ。準備をもう少ししてほしかったというコメントもあり、今後対応すべき課題である。英語力向上は当然ながら、例えばネイティブスピードに慣れる、下田市の文化や歴史を英語で予習するなどの準備が有効だろう。

最後にプロジェクト全体をとおしてのふりかえり（上述した英語力・英語指導力以外）からは、得られた学生個人の学びの上位は、仲間との協力の大切さとおもしろさ、一つのことを成し遂げる達成感、積極性、視野の広がり、責任感、協調性であることが明らかになった。子どもたちに向き合う中で、子ども理解だけでなく自分自身についても考える良い機会になったことが分かった。切磋琢磨し合える仲間ができたことを大きな喜びとする学生もいれば、下田市の魅力に触れることができた学生もいる。3日間触れ合った児童の積極性、前向きさ、一生懸命さに刺激を受け、見習おうとする学生もいる。教職志望の有無にかかわらず、教師の仕事の大変さとやりがい、魅力を実感することもできた。教師になりたいという夢をあらためて強く持つこともできた。

今回の検証結果から学生たちにとっては、英語力、英語指導力、仲間作り、自己成長、他者理解、将来への展望をもつ等あらゆる点でインパクトの大きいプロジェクトになったことが確認できたと言えるだろう。過去には2年次で本プロジェクトに参加した学生が3、4年次で再度参加する意思を見せたり、普段からその経験に言及したり、後輩に参加を勧めたりするなど長期的な効果が確認されている。英語指導だけでなく、児童と水兵との交流も学生にとっては滅多にできない貴重な経験となっていることが検証結果でも示された。

以上のとおり、学外での実践を含むアクティブ・ラーニングへの参加により、学生は幅広く、かつ深い学びを得たことが認められた。本プロジェクトへの学生の満足度は非常に高く、より成長した状態で次の機会にも参加したいという意志も確認できた。

具体的な課題も多々明確になった。多くの課題に対応するためには何よりもまず準備開始を早めより多くの時間をかけることから始めなければいけない。

課題を浮き彫りにすることは改善をするために必要不可欠であるが、それができたのは下田市の先生方のご指導とフィードバックによるところが大きい。一方で参加児童の感想やフィードバックを分析対象に含めることができなかったのは、今回の反省であり、次の研究課題として残される。学生のかかわりによって子どもたちにどのような変容が生まれたのかも検証することで、より意義のあるプロジェクト作りができていこう。今回得られた示唆を今後のプログラムに早速活かしていきたい。

〔謝辞〕 本プロジェクトを実現させてくださった下田市教育委員会、下田小学校はじめ関係者の皆様、また本研究にご協力いただいた方々に心から感謝申し上げます。

## 注

- 1) 玉川大学HP : [http://www.tamagawa.jp/news/news\\_release/detail\\_10368.html](http://www.tamagawa.jp/news/news_release/detail_10368.html) (2018/03/08閲覧)
- 2) 英語教育学科では、国際共通語としての英語運用能力を身につけ、積極的に国際社会に貢献できる人材、および社会の多様な場面で英語教育を実践できる人材の養成をめざし、「英語教員養成コース」と「English as a Lingua Franca (ELF) コミュニケーションコース」の2つのコースを設置している。
- 3) J-POSTLとはEPOSTL「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(the European Portfolio for Student Teachers of Languages)を基に日本の文脈になじむよう翻案化したもので、2014年に大学英語教育学会教育問題研究会によって作成されたものである(JACET SIG on English Language Education, 2014; 1-3)。本ポートフォリオは原作のEPOSTLの言語理念である行動志向の言語観(Action-oriented view of Language)と生涯学習(Life-long Learning)に基づき、場面・概念・機能シラバスによる人同士の交流を中心としたコミュニケーション指導法(CLT)に立脚している。主な目的として、教師に求められる授業力と知識を省察するよう促すこと、向上しつつある自分の力量に対して自己評価を促すことなど5点があげられている。筆者の一人である米田は、このポートフォリオを参照すること自体が指導に対する気づきを与え、効果的であると考えている(米田, 2015)。
- 4) 玉川大学ELFセンターでは、2017年現在14か国の国籍、11の母語を持つ、50人以上の教員が英語を教えている。(<http://www.tamagawa.ac.jp/celf/teacher/>) (2018/03/08閲覧)

## 参考文献

- 下田市教育委員会「下田一玉川英語教育連携事業 H29英語力向上プロジェクト～打ち合わせ資料(下田市教委)」下田市教育委員会, 2017年3月29日, ページ数記載なし
- 下田市立下田小学校「平成29年度黒船交流会 玉川大学黒船交流プロジェクト」下田市立下田小学校, 2017年, pp. 2-8
- 大学英語教育学会(JACET)教育問題研究会編著『言語教師のポートフォリオ【英語教職課程編】』JACET教育問題研究会, 2014年
- 玉川大学HP  
[http://www.tamagawa.jp/news/news\\_release/detail\\_10368.html](http://www.tamagawa.jp/news/news_release/detail_10368.html) (2018/03/08閲覧)  
<http://www.tamagawa.ac.jp/celf/teacher/> (2018/03/08閲覧)
- 玉川大学文学部・静岡県下田市『静岡県下田市-玉川大学連携事業 下田プロジェクト 黒船交流ボランティア&英語授業活動 2016年度活動報告』玉川大学文学部・静岡県下田市, 2016年
- 玉川大学文学部黒船交流プロジェクト『黒船交流プロジェクト 2017年度活動報告』玉川大学文学部, 2017年

樋口耕一「KH Coder 掲示板」

[http://www.koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs\\_khn/khcf.cgi?no=1313&mode=allread](http://www.koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=1313&mode=allread) (2017/01/03 閲覧)

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』京都：ナカニシヤ出版，2014年

文部科学省「小学校学習指導要領 抜粋 第4章 外国語活動」『小学校外国語活動 研修ガイドブック』旺文社，2009年，pp. 110-112

米田佐紀子「小学校教師志望学生にもたらす小学校英語教育実習の効果に関する調査研究—『言語教師のポートフォリオ』使用の試みから—」『言語教師教育』Vol. 2, No. 1, 大学英語教育学会 (JACET) 教育問題研究会，2015年，pp. 78-92

米田佐紀子「小学校英語教育実習を通して得られた教員養成課程学生の学びに関する実証的研究」『言語教師教育』Vol. 4, No. 1, 大学英語教育学会 (JACET) 教育問題研究会，2017年，pp. 11-30



資料1 事前アンケート

黒船交流プロジェクト 事前アンケート

1. 小学校で英語の時間がありましたか？ どのようなものでしたか。
2. 小学校で英語に触れさせるねらいは何だと思えますか。
3. みなさんの授業を成功させるには何が必要で、みなさんはどうすればいいと思えますか。
4. 今回の授業を成功させる自信はありますか？ 1つ選び○で囲んでください。その理由を簡単に書いてください。

⑤大変ある ④まあまあある ③どちらともいえない ②あまりない ①全然ない

〈理由〉

資料2 事後アンケート

黒船交流プロジェクトについて

回答方法は、各問い4段階評価【(4) とてもそう思う (3) どちらかと言えばそう思う (2) あまりそう思わない (1) 全く思わない】で、右端の回答\_\_\_\_\_に番号を書き込み（例 4）、なぜその番号を選んだのか具体的にでも簡単に記載してください。1ページに収まらず2ページになってしまってもかまいません。

**A. 英語指導について**

1. 英語指導は自分にとって有意義でしたか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
2. 本指導を通して自分の英語指導力が上がったと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由（特にどのような点か具体例も）\_\_\_\_\_
3. 本指導を通して自分の英語指導力に自信がついたと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
4. 本指導を通して自分の英語力が上がったと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
5. 本指導は将来役立つと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
6. 本指導で難しいと思ったこと、うまくいったことは何ですか。それぞれについて具体例を挙げて書いてください。
7. その他何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由に書いて下さい。

**B. 水兵さんとの交流について**

1. 水兵さんとの交流は自分にとって有意義でしたか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
2. 水兵さんとの交流を通して自分の英語力が上がったと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
3. 水兵さんとの交流は将来役立つと思いますか。 回答\_\_\_\_\_  
理由\_\_\_\_\_
4. 本交流で難しいと思ったこと、うまくできたと思うことは何ですか。それぞれについて具体例を挙げて書いてください。

\*\*\*\*\*

- 本プロジェクト全体を通して、英語力、英語指導力以外に、あなたが身についたと思う力や、学んだこと、将来役立ちそうな経験があれば、具体的に記入してください。

- 上記以外に何でも気づいたこと（良かった点・改善すべき点）を自由に書いて下さい。

## 資料3 J-POSTL 授業力自己評価記述文

I 教育環境	B. 目標とニーズ	1. 英語を学習することの意義を理解できる。
		2. 学習指導要領と学習者のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。
	C. 言語教師の役割	3. 学習者が英語を学習する動機を考慮できる。
		4. 学習者の知的関心を考慮できる。
5. 学習者の達成感を考慮できる。		
2. 学習者の母語の知識に配慮し、英語を指導する際にそれを活用できる。		
4. 学習者からのフィードバックや学習の成果に基づいて、自分の授業を批判的に評価し、状況に合わせて変えることができる。		
5. 他の実習生や指導教諭からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。		
D. 組織の設	6. 他の実習生の授業を観察し、建設的にフィードバックできる。	
	7. 計画・実行・反省の手順で、学習者や授業に関する課題を認識できる。	
	8. 授業や学習に関連した情報を収集できる。	
	1. 実習校における設備や教育機器を、授業などで状況に応じて活用できる。	
II 教授法	A. スピーキング活動	1. 学習者をスピーキング活動に積極的に参加させるために、協力的な雰囲気を作りだし、具体的な言語使用場面を設定できる。
		2. 自分の意見、身の周りのこと及び自国の文化などについて伝える力を育成するための活動を設定できる。
		5. 強勢、リズム、イントネーションなどを身に付けさせるような様々な活動を設定できる。
		6. 語彙や文法知識などを用いて正確に話す力を育成するための音声指導ができる。
	C. リスニング活動	1. 学習者のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。
		2. 学習者が教材に関心が向くよう、聞く前の活動を計画できる。
		3. 学習者がリスニングをする際に、教材のトピックについて持っている関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。
	E. 文法	5. 学習者に英語の話し言葉の特徴に気付かせるような活動を立案し設定できる。
		2. 文法は、コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち、使用場面を提示して、言語活動と関連付けて指導できる。
		F. 語彙
G. 文化	1. 英語学習を通して、自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を引き起こすような活動を設定できる。	
III 教授資料の入手先		1. 学習者の年齢、興味・関心、英語力に適した教科書や教材を選択できる。
		2. 学習者の英語力に適した文章や言語活動を教科書から選択できる。
		3. 教科書以外の素材から、学習者のニーズに応じたリスニングの教材を選択できる。＊
		5. 学習者に適切な教材や活動を考案できる。
IV 授業計画	A. 学習目標の設定	2. 2回の指導計画に即して、授業ごとの学習目標を設定できる。＊
		3. 学習者の意欲を高める目標を設定できる。
		4. 学習者の能力やニーズに配慮した目標を設定できる。
		2. 言語や文化の関わりを理解できるような活動を立案できる。
	B. 授業内容	3. 文法学習や語彙学習をコミュニケーション活動に統合させた指導計画を立案できる。
		4. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して、指導計画を立案できる。
		5. 学習者がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。
		6. 学習者のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。
	C. 授業展開	8. 学習者の反応や意見を、授業計画に反映できる。
		1. 学習目標に沿った授業形式をえらび、指導計画を立案できる。
2. 学習者の発表や学習者同士のやりとりを促す活動計画を立案できる。		
3. 英語を使うタイミングや方法を考慮して、授業計画を立案できる。		
V 授業実践	A. レッスンプランの使用	4. 友人とのチームティーチングの授業計画を立案できる。＊
		1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。
		2. 指導案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行とともに学習者の興味・関心に対応できる。
		3. 学習者の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。
	B. 内容	4. 本時をまとめてから授業を終了することができる。
		5. 予期できない状況が生じたとき、指導案を調整して対処できる。
	C. 学習者とのインタラクション	1. 授業内容を、学習者の持っている知識や身近な出来事や文化などに関連づけて指導できる。
		1. 授業開始時に、学習者をきちんと席に着かせて、授業に注意を向かせるように指導できる。
		2. 学習者中心の活動や学習者間のインタラクションを支援できる。
	D. 授業運営	3. 可能な範囲で、授業の準備や計画において、学習者の参加を奨励できる。
1. 個人学習、ペアワーク、グループワーク、クラス全体などの活動形態を提供できる。		
E. 教室での言語	2. フラッシュカード・図表・絵などの作成や視聴覚教材を活用できる。	
	1. 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。	
	2. 学習者が授業活動において英語を使うように設計し指導できる。	

\*本プロジェクトに合わせ、一部文言を修正した項目。

#### 資料4 下田小学校学級担任からのフィードバック

##### 《良かった点》

##### 1年生

- ・英語がはずかしくて言えない子も、音楽に合わせて言うことができた。
- ・学生の作ってくれたドラえもん、キティちゃん……などのカードで、英語で仲間集めをした。作ってくれたカードが子どもに人気で、子どもは喜んで取り組んだ。英語にも慣れて、自信をもって言えるようになった。
- ・1日目の反省を生かし、1度座らせるなど、学生が工夫してくれたので指示が通りやすくなった。
- ・大学生も一生懸命子どもたちと関わっており、子どもたちも非常に楽しんで取り組んでいた。楽しく活動する中で、What's your name? My name is ~のフレーズを身に付けることができた。
- ・名刺交換ゲームでは、子どもたち一人一人の名刺と名刺入れを大学生が作成してくれてあり、子どもたちは楽しく活動することができた。

##### 2年生

- ・イラストとジェスチャーを結びつけて何回も発音したので、子どもたちにとってはわかりやすく、スポーツの名前を英語で元気よく言うことができた。
- ・子どもたちは初めはCan you playの尋ね方にとまどっていたが、回数を重ねるごとに言い方がわかり、自信をもって答える子が増えていき、子どもたちも楽しそうだった。
- ・Do you like ~の言葉の練習、単語の練習をはじめに音声だけで行った。ゆっくり話したり、早く話したりしながら習熟をはかろうとしたことは良かった。
- ・テンポよく授業が進んだことは良かった。
- ・大学生の笑顔や雰囲気が好感をもて、子供たちにとって親しみやすかった。
- ・前日の授業での反省を生かし、音声だけではなく、黒板に言葉が見えるようにすることで、言い方や言葉の習熟を図ることができた。子供たちは、自信を持って話し始めた。
- ・ハンバーガーの部品が、とても良くできていて、子供たちは出来上がりに満足していた。
- ・時間の使い方も適当だった。
- ・Do you like ~の使い方がわかり、給食や昼休み、その他でも、これを利用して質問している姿が見られた。

##### 3年生

- ・食べ物の写真を活用したことで、子どもの関心が高まり、多くの子どもが大きな声で発音練習から楽しんでいた。
- ・カルタ取りをすることで、子どもたちは楽しみながらも、指導者の言葉を一生懸命に聞こうとしていた。
- ・前時の食べ物からの流れで、自然に学習に入っていた。

- ・買い物遊びは、前時の内容と本時の内容を子どもたちが使いながら進められるようになっていてよかった。
- ・スタンプラリーのカードは、意欲づけに効果があったと思う。
- ・学生たちが元気よく明るく対応していたため、子どもたちもそれほど恥ずかしがることなく英語に親しんでいた。
- ・活動には、子どもたちが興味を持って取り組んでいた。ゲームにすることで、自己紹介や好きな色の答え方を楽しみながら学ぶことができた。
- ・カラーマッチングゲームは、普段から親しんでいる遊びだったため、どの子もすぐに覚え楽しんで参加していた。
- ・虹を作ろうゲームでは、相手に好きな色を尋ねて、答えた色を塗るという活動を楽しんでいた。英語を活動を交えて楽しく学ぶことができていた。

#### 4年生

- ・子どもたちが1～10の英語は予想よりすらすらと言えたため、ゲームの時間を増やしたり、じゃんけんをしたりと、活動を工夫してくれた。
- ・子どもがやってみたくなる活動だった。指導者のデモンストレーションや、教具の工夫により子どもたち一人ひとりが楽しんで行っていた。
- ・最後に、一人ひとりが指導者のところに行って英語で数字を言うテストをし、個々にふれあうこともできていた。
- ・子どもたちは、楽しそうに発音し、質問解答のやりとりも無難にこなしていた。
- ・カルタは、子どもたちが積極的に取り組んだ。その都度カードを読みあうなど発生を意識して取り組んだ。

#### 5年生

- ・覚えた単語が定着しているかどうかゲームで確かめる（早抜けゲーム）大変盛り上がった。
- ・正しい発音が学べた。

#### 6年生

- ・学生の進行がリズミカルで、子どもたちが飽きることなく授業ができていた。
- ・事前に、絵などを準備していたよかったが、準備したもの以外のことを子どもが言ったときに対応していたのもすばらしかった。
- ・好きな色の対決で同点だったときに、自分たちの計画を無理に進めることなく、子どもたちが気になっていることを優先して、実態に応じた活動を行ったことがすばらしかった。
- ・1日目には不十分だった、my favorite ～のフレーズを何度も練習してからアクティビティに入っていたのがとても良かった。また、途中でそれでも言い方がわからない様子が見られたときに、一度活動を中断してもう一度my favorite ～のフレーズを確認しながら展開していたのがすばらしかった。
- ・後ろにつけたカードをヒントを教えてもらいながらあてる3ヒントゲームは楽しんでいた。



- ・メニューを決めるのは、とても活動的で楽しんでいた。

## 《改善点》

### 1年生

- ・5校時ではしゃぎすぎて眠くなったり、指示に従わなかったりする子もいた。
- ・55分くらいやったので、やや長めで最後は集中できなかった。
- ・5時間目の授業で、机とイスを後ろに下げて活動していた。その際、子どもたちが立ったまま話をしたり、指示をしたりすることが多かったので、集中が続かないこともあった。
- ・活動の時間が長かったので後半は少し集中が切れてしまっていた子どももいた。また、一度名刺交換ゲームの説明をしてから、前時の復習の時間に入ったので、子どもたちにもう一度説明しなくてはいけなくなっていた。
- ・前時でたくさん What's your name? My name is ～をやっていたので、子どもたちも良くできていたが、さらにできる子向けに、別のフレーズがあってもよかった。

### 2年生

- ・フロアでの活動だったので、ルールがない中だと活動が広がりすぎた場面も見られた。
- ・音声だけだったので、児童の中には、言い方や言葉の習得に困難な子がいた。

### 3年生

- ・子どもたちが盛り上がりすぎて、指導者の指示・説明をしっかりと聞けない場面があった。
- ・時間配分に改善が必要だった。同じ活動の繰り返しになってしまったことから、子どもたちが飽きてしまうことがあった。
- ・もう一つ、別の活動（ゲーム等）を入れたほうがよかった。
- ・カラーマッチングゲームでは、グループごとに終わっている時間に差があり、早くできたグループが時間を持て余していたため、何回もやっていいことにするか、時間でどんどん区切ってもよかった。
- ・虹を作ろうでは、色が重ならないように5色を集めることを理解できていない子が多かったため、理解できている子とできていない子との間で戸惑いが生じる場面もあった。

### 4. 5年生

記載なし

### 6年生

- ・my favorite ～のフレーズを子どもたちに定着させる前に、活動を行ったので、チャンツなどを通して、フレーズに慣れさせるとさらによくなると思った。
- ・子供の実態や学年に応じた発達段階が分からないのは仕方がないですが、絵を描いたりするときの作業時間の想定が甘かったので、時間が苦しくなっていました。
- ・子どもたちが知っているゲームも多かったので、テンポ良く進めてもよい。
- ・子どもの様子をみて「ちょっと……」と思ったら、思い切ってやり方を変えるのもよい。

- ・口で説明するだけでなく、デモンストレーション（笑いあり）でやると子どもが乗ってくる。
- ・よい子どものあらわれを見つけて広げたりすると活動がさらに活発に。

《その他》

- ・放課後の家庭科室での振り返りでは、授業内容を具体的に、的確に振り返ることができていた。

（よねだ さきこ）

（おおた みほ）

# An Investigation into the Effects of an Active-Learning Project Collaborated by a Region & University: What did Japanese University Students Learn from Doing English Activities to Elementary School Pupils?

Sakiko YONEDA, Miho OTA

## Abstract

This research investigated the effects of an active-learning project conducted in Shimoda, Japan. The project consisted of two university English classes hosted at an elementary school and helping the children interacting with/or giving city tours to US naval sailors in May 2017. Materials for analysis included pre- and post-questionnaires, J-POSTL, and feedback from homeroom teachers at the elementary school; several perspectives were explored including: English proficiency, teaching skills, how to communicate with children, how to communicate with the sailors, and how to be a facilitator between children and sailors during the city tour. Analyses were performed using the KH Coder 3 and *t*-tests.

The results showed that students found the project rewarding and they gained a sense of accomplishment after putting in a lot of time and energy. The project was helpful in terms of career design. Students also realized their weaknesses such as teaching skills and English proficiency, which they were determined to overcome in the future.

**Keywords:** elementary school English activities, active-learning, institutional/governmental collaboration between a region and a university, Shimoda City, KH Coder, J-POSTL